

明日に生きる

—作文コンクール入選作品集—

第26号



平成27年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

このイラストは、『楽しく仕事をしている人』をイメージして描きました。仕事というと厳しかったり、責任のともなう大変なイメージがあったりしますが、自分のやりたい仕事をすることは楽しくてやりがいのあるものであると思い、それらを伝えられるように意識して、全体的に明るく笑顔な感じのイラストにしてみました。

東京都立王子総合高等学校
1年 松田 恵美

明日に生きる

第二十六号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる 第二十六号 ― 作文コンクール入選作品集 ― 目次

講 評

選考を終えて

中学校の部

選考委員長（葛飾区立葛美中学校長）

志村 昌孝 1

選考をとおして

高等学校・専修学校の部

選考委員長（東京都立農業高等学校長）

金子 勉 2

表彰式の記念写真

中学校の部

ページ

最優秀賞 生き方を考える

大田区立大森第一中学校

二年 男澤 和輝

5

優秀賞 四つの力

大田区立大森第六中学校

二年 佐藤 真智

7

優秀賞 職場体験が教えてくれたこと

足立区立第六中学校

三年 鏑木 愛美

8

佳作 夢

愛国中学校

三年 浅井 彩華

10

佳作 働くことの喜びと達成感

中央区立晴海中学校

三年 遠藤 佑香

11

佳作 全ては相手を考えて

墨田区立両国中学校

二年 西本 朱里

13

佳作 何かを想う気持ち

中野区立第七中学校

三年 大橋 由依

14

佳作 栽培の楽しさとその技術

中野区立第七中学校

三年 宮崎 大悟

15

佳作 校外講座で理科と技術を学んで

北区立稲付中学校

三年 高谷 直希

16

佳作 物作りが夢に

練馬区立開進第四中学校

三年 安部 葉南

19

佳作 職場体験から学んだこと

足立区立第六中学校

三年 高橋 美咲

20

佳作 ものづくりを通じて作る未来

足立区立第六中学校

三年 辻村 茉緒

22

佳作 作物を作り育てるということ

葛飾区立堀切中学校

三年 木村 真夕

23

高等学校の部

ページ

最優秀賞	あの看護師さんのような看護師に	愛国高等学校	三年	鯨井 未来	25
優秀賞	大きくなれた私	東京都立農芸高等学校	三年	鈴木 晶葉	26
優秀賞	畜産を学んで	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	五十嵐 香月	28
優秀賞	人工授精師を目指して	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	佐野 ゆづき	30
佳作	笑顔がくれる力	愛国高等学校	三年	石川 沙重羅	32
佳作	会計コースでできた夢	愛国高等学校	三年	成 澤 悠衣	33
佳作	夢を叶えたら	愛国高等学校	三年	松下 桃子	35
佳作	私の進路	日本工業大学駒場高等学校	一年	高橋 ななこ	37
佳作	農業！	東京都立農業高等学校	二年	伊藤 香菜海	38
佳作	馬との出会い	東京都立農芸高等学校	二年	大澤 萌	40
佳作	命の尊さ	東京都立瑞穂農芸高等学校	四年	有村 今日子	42
佳作	専門教科の学習で学び得たこと	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	小林 芙由	43
佳作	将来の夢	東京都立忍岡高等学校	三年	坂本 理香	45
佳作	私の将来の夢	国際理容美容専門学校	二年	早坂 実莉	46

専修学校の部

ページ

優秀賞	将来の夢	東京エアトラベル・ホテル専門学校	二年	保科 希帆	48
佳作	決まっていた進路	青山製図専門学校	一年	甲斐 あす香	50
佳作	ボランティア活動で得たもの	東京エアトラベル・ホテル専門学校	二年	緒方 春佳	51

応募校等一覧表

作文コンクール選考委員名簿

あとがき

選考を終えて

中学校の部 選考委員長

志 村 昌 孝



今年度の中学校の部の応募数は、八十二編あり、その中から、第一次審査、第二次審査を経まして、十三作品を入選とし、最優秀賞一名、優秀賞二名を選考いたしました。どの作品も甲乙つけがたい内容であり、選考にあたっては委員を悩ますものでした。

今回、最優秀賞を受賞した『男澤 和輝さんの「生き方を考える」』は、職場体験に児童館に行った体験が述べられた作文でした。

人の言葉や行動に流されてしまいがちな自分を変えていこうと、自分で体験先を決め、そして体験先では、小さな子と遊んだり、その保護者と話をしたりする中で、主体的に考え行動している自分の達成感を素直に感じたことが語られておりました。

また、主体的に働くことの大切さに触れ、自分の生き方において見つめることで、周りの人に左右されずに、自分の意志で決めていく生き方をしていくことが力強く語られ、その決意が選考委員に伝わってくるものでした。

さらに、優秀賞の『佐藤 真智さんの「四つの力」』では、病院での職場体験で学んだ四つのこと、「笑顔」「協力」「苦勞」

「何かを想う心」を学んだことが述べられていました。これは、普段の生活でも大変大切なことであります。体験を通して、日常の生活に活かしていこうとする意欲が感じられました。

そして、もう一人の優秀賞の『鏑木 愛美さんの「職場体験が与えてくれたこと」』では、パン屋さんに職場体験に行き、自分の将来の夢である海外で働きたいという思いと照らし合わせて、自分の将来の職業について真剣に向き合っていたことが述べられておりました。「楽しんで稼げることはない」と、苦勞して給料をもらおうということを学び、自分の将来に活かすことにつながったと語られた、選考委員も共感したものでした。

入選した作文の内容は、技術・家庭科の授業での体験的な学習や職場体験、ボランティア活動などの体験的な学習から素直に感じたことや考えたことが語られ、その学び得たものからこれからの生活への意欲や将来の夢や強い決意をも述べたものであり、とても魅力があるものでした。また、未来を担う皆さんの力強い姿勢が、大変頼もしく感じました。

これからの社会は、ますますグローバル化し、多様な価値観と協働していくことが求められます。そのような中で、これからの人生をどのように拓いていくのか、自らの生涯を生き抜く力を、この中学校の生活の中で培っていくことが求められます。

中学校は、自分はどうな良さがあるのか、個性をみつけ、その個性を磨き、伸ばすところです。そのような点では、ここに受賞された皆さん、個性あふれる人ばかりです。これからの時代を担う皆さんには、よりよい社会を築く一員として、また幸福な人生を創り出していくよう、これから皆さん個性を磨き、伸ばしてほしいと期待しております。

選考をおして

高等学校・専修学校の部 選考委員長

金子 勉



佳作二名の計三名を入選者として決定しました。

どの作品からも現在在籍している高等学校や専修学校になぜ入学することにしたのか、そこでどのような学習や経験を積んできているのか、そして、自分の将来をどのように描こうとしているのか、そういったことが伝わってきました。

募集要項では、作文の内容について、「学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの」と書かれています。なぜ現在在籍している学校に入学したのか。その学校で何を学び、何を体験し、何を考えてきたのか。その学習や体験や考えてきたことを将来に向かってどうつなげていくのか。そうした過去・現在・未来が具体的に明確であり、将来につなげていくとする強い思いを伝えられていた

作品が最優秀賞や優秀賞、あるいは佳作として選ばれたと言えます。この点では、専修学校の部において、そのことを強く述べた作品が少なかったことは残念でした。専門高校、専修学校の目的は、「スペシャリストの育成」です。この点をしっかりとおさえた上で、日頃の学習や体験に臨み、将来につなげていってほしいと思います。

これから様々な場面で文章を書いたり、進学や就職試験などの面接の場で話をする必要があると思います。こうした視点から文章や話の構成を考えると良いと思います。何よりも、自分の生き方の軸がしっかりとしてくると思います。

作品を応募するにあたって心がけておいていただきたいことがあります。それは、「自分の作品を読んでもいただく」という気持ちを持つことです。応募方法の「作成上の注意」に「自筆で作品を書く場合はHB以上の濃い鉛筆等を用いて丁寧に、鮮明に書くこと」とあるようにこのことは応募にあたっての基本的なマナーです。また、文字数についても「原稿用紙、四枚以上六枚以内とする」となっていますが、たくさん書けば良いというものではありません。例えば、最初は原稿用紙七、八枚くらいに書いてみて、それを五枚程度にまとめるといくと洗練された読み手に感動を与える文章が出来上がると思います。

最後になりましたが、今回の作文コンクールへの応募を通して現在の学校における自分の在り方、生き方について考えを深め、将来への方向性を明確にすることができたとしたら幸いです。また、ご指導をされてこられました先生方には感謝申し上げます。これからも生徒たちの希望あふれる未来に向かってご指導のほど、宜しくお願いいたします。



平成 27 年度 作文コンクール表彰式（中学校の部） 12 月 15 日 東京都産業教育振興会



平成 27 年度 作文コンクール表彰式（高等学校・専修学校の部） 12 月 15 日 東京都産業教育振興会

中学校の部 最優秀賞

生き方を考える

大田区立大森第一中学校 二年

男 澤 和 輝

自分のことは好きだ。そんな僕が、一つだけ直したいことを挙げるとすると、「人の言葉や行動に流されてしまうこと」だ。友だちが辞めたからという理由で、部活も辞めてしまった。将来のことを考えたとき、このままでもいいのかと、つくづく思う。

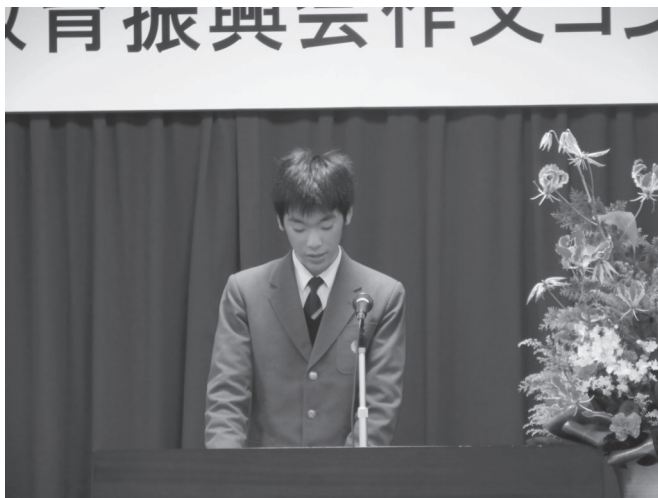
第二学年の総合的な学習の時間は、『生き方について考えよう』というテーマで学習をしている。「なぜ、人は働くのだろう」という小テーマでは、一人暮らしをするのに必要なお金や家族への職業観インタビューを通して、働く目的について考えた。「自己理解」という小テーマでは、自分の特性や職業に対する適性について考えた。こういった授業内容が増えたことで、友だちと志望校について話すことが多くなった。志望理由を聞くと、お兄ちゃんが通っているから、近くだから、親が勧めるからと答える仲間が多く、僕もその一人だ。今考えれば、将来の生き方さえも、人の言葉に流されていたのだと思う。

そんな中、総合の授業で「職場体験」の取り組みが始まった。職場の希望調査は、体験してみたい産業を書くものだった。

た。僕は、児童館や保育園を第一希望にした。それを見た友だちからは、意外だと驚かれた。このとき、周囲から見られている自分と、自分が思っている自分は全く違うのかなと思った。「自己理解」の授業の中で、友だちも「自分ってこんな風に見られているんだあ」と言っていた。いつも一緒に行動している友だちでも、知らない一面がたくさんあるのかなと思った。

体験場所が発表された。児童館に行くことが決まったときは嬉しかった。班長にも立候補して、頑張ってみようと思った。なぜこの職業を選んだかというと、「一番身近な職業だから」というのが大きい。つい最近まで、児童館で遊んでいたし、休みの日は一日児童館にいることも少なくなかった。

児童館に行けば、必ず友だちがいた。困ったときは、スタッフの人が優しく助けてくれることもあった。僕にとつての、第二の学校みたいな存在が児童館だった。そんな、よく知っている場所で体験してみたいと思ったのは、自然な



中学校の部 最優秀賞 男澤和輝君の朗読

流れだったように思う。

職場体験当日。職場の方々に挨拶をし、最初の仕事に取り組んだ。「赤ちゃんタイム」という、生後間もない小さな子たちと遊んだり、その保護者と会話したりするというものだった。保護者の方たちは、僕の名前の由来や母親のことをどう思っているかなど、これまであまり考えたことのないことを聞いてきた。受け答えに苦労したけど、なんだか楽しい気持ちになった。誰かに必要とされることは、すごく気持ちのいいことだなあと改めて思った。

「赤ちゃんタイム」は一時間だった。児童がやってくるのは三時ごろ。それまでの時間は休憩かと思っていたが、違った。児童への配布物を作ったり、工作の準備をやったり、遊びに来ていたときには想像もしていなかった仕事だった。作る量の多さに投げ出したい気持ちになった。やすりでプラスチックの板を削っているときは、水ぶくれの痛さに悩まされた。スタッフの方がこんな苦労をしていたとは知りもしなかった。

三時になり、子どもたちが遊びに来た。僕たちの存在に困惑していた子どもたちも、作ったものを渡すと、笑顔で受け取ってくれた。しかし、僕が苦労して作ったものを平気で投げ捨ててしまっている子たちを見て、怒りを通り越して、あきれってしまった。みんなのために作ったのに……。そのとき、ふと去年の技術の授業を思い出した。自分たちが作った本棚を研磨紙で磨く僕たちに、技術の先生がこんな話をしてくれていた。「研磨の作業は地味だけど、ここで気持ちを込めるんだよ。いい作品になれて気持ちで磨いてあげたものは、やっぱり

長く使いたくなるよね。」と。児童館での工作は「みんなのために作ったのに……」というのはウソではない。でも、「みんなのことを思って主体的に作った」わけではない。だから、「大切に使いたい」と思わせることができなかったのかなと後悔した。技術の授業で学んだことは、働くって何だろうの答えの一つかなと思う。そのことを思い出してから、児童への接し方を変えてみようと思った。「こっち来て」「ブロックで遊ぼう」と、同時に声を掛けてきたとき、「後で行くから待っていてね。」と言っても、納得してくれない。そこで、同じ言葉でも視線を合わせて、気持ちを込めて言うようになった。不満そうな顔はするが、静かに待っていてくれるようになった。

帰りの会では紙芝居を読むことになっていた。このときは国語の授業で落語を発表したときのことを思い出した。登場人物になりきって語るためにはどうするか、いろいろと工夫をした。その経験が役に立った。一生懸命に読む僕の方を見つめる子どもたちの視線は、すごく恥ずかしくもあり、嬉しくもあった。

三日間の職場体験はあつという間だったが、大切なことを学んだ。それは、主体的に行動するかどうか、仕事への達成感や結果を大きく左右するということだ。そして、主体的に行動するためには、これまでに学習してきた知識が土台になる。苦手だからと何となく取り組んでいる教科でも、社会に出たときに役に立つ場面は多いように思う。身近な施設であつた児童館は、人の言葉や行動を参考にし選んだ、自分が本当にやりたい職業だった。そしてスタッフや訪れた保護者

の方々のおかげで主体的に働くことができた。これからも、そんな生き方をしていきたい。

僕は今、もう一度部活を始めた。今度は自分の意思で決めた。職場体験を通して、自分の生き方を見つめることができたような気がする。

中学校の部 優秀賞

四つの力

大田区立大森第六中学校 二年

佐藤 真智

「ここで働く人は皆、協力して患者さんを支え、守っていきます。だから、その患者さんから感謝の言葉をいただくと勇気をもらえ私たちも元気になります。」

これは、私が職場体験に行った東急病院でインタビューをした時にいただいた言葉です。この言葉一つからでも働くということがどれだけ大変でどれだけやりがいのあるものなのか分かります。患者さんの、何人もの命を体を心を預かっている病院で働く人たちは患者さんを第一に考え全力で働いていました。

この職場体験で私達は三日間、管理部門、診療技術部門、看護部門、とそれぞれ一日ずつ体験させていただきました。

たったの三日間でしたがそれでも学んだことはたくさんありました。

一つは、笑顔の力です。職場体験中の三日間どの部門へ行っても、誰にインタビューをしても皆さん笑顔で私たちに接してくれました。病院職は一種のサービス業ともいいますが、その笑顔はとても気持ちのいいものでした。もし、入院してしまったときにお医者さんや看護師さんが笑顔ではなく、怒った顔で診察をしにきたら、私だったら体だけではなく心の中まで暗くなってしまうと思います。それが笑顔だったら安心して自分が今が痛いのかや何が気になっているのかを話せるのではないのでしょうか。病院で働く人たちは技術で体を救うだけではなく、その笑顔で患者さんの心までも救っているのだと分かりました。

二つめは、協力することです。大きな力が生まれるということです。病院内は、受付の方のあいさつから始まり、医師に診察してもらい、入院すれば専門医にみてもらい、看護師がケアしてくれて、資料などは事務の方々が整理してくれていました。つまり、患者さん一人一人のために何人もの人が動き支えていたのです。患者さんを守るのだと心を一つに医師も看護師も専門医もそして事務の人も全員で力を合わせていました。その姿に私はとても感動しました。

三つめには、どんな仕事も楽ではないということです。特に病院は命を預かっている場所なのでより一層大変さを感じました。三日間しか体験してない私が思うくらいです。からきつと毎日働いている大人たちはさらに大変なのだと思います。でも、その大変さもストレスも仕事仲間に分け合って、

大変さをやりがいに変えていっているのではないかと思いました。そのやりがいでの次の仕事に向かって進み続けているのだと感じました。

そして最後は、皆「何かのために」働いているのだということです。その「何か」は自分だったり患者さんだったり家族だったり、その人や職業によって違うとは思いますが、それを守りたい、支えたい、大切にしたいという思いは皆一緒なのではないかなと思いました。人に動くを書いて「働く」と書きます。自分のために勉強して、人のために働く。私たちの人生というものはすごく大きなものではないかと感じる事ができました。

この四つはいつか絶対自分の力になると思います。笑顔、協力、苦労、そして何かを想う心。学校生活の中でも生かせることは山ほどあります。笑顔で仲間と接すること、協力して皆で何でも乗り越えていくこと、苦労をやりがいに変えていくこと、何かを想って動くこと。ちりも積もれば山となる。どんなに小さいことでも積み重ねていけば必ず自分が大人になったときに役に立っていくのではないのでしょうか。「働く」ということはまだ中学生の自分からしたら少し遠い未来のことなのかもしれませんが、あと二年もしないうちに自分で働ける年齢になってしまいます。そう考えると意外と遠くもないのかもしれませんか。だから、これから出ていくであろう大きな山場を乗り越えられるように今から少しずつでも大人に近づいていけたらいいと思います。今回学んだことを忘れずに、今日を明日を歩んでいきたいです。

職場体験が教えてくれたこと

足立区立第六中学校 三年

鏑木 愛美

私は、「仕事」というものにとっても興味がある。働いて、お給料をもらう。とても簡単そうに聞こえるが、実際はそうではない。私はそれを、二年生のときの職場体験で知った。私の職場は、パン屋さんだった。そこは、とても明るい雰囲気、優しい方ばかりだったが、ずっと立ちっぱなしのうえ、お昼休憩は、三十分程というスケジュールだった。足が棒のようになってしまい、とても疲れた。職場体験でこの疲れなら、毎日ここで働いている人は、もっと疲れが溜まるだろう。そう思うと、仕事を甘く見ていたと、強く反省した。体験中、ふと考えたことがある。ここには、英語を話すことができる人はいなさそうなのに、外国人のお客さんが買いに来たとき、どういった対応をするのだろうか？と。そう考え始めると、パン屋にとどまらず、いろいろな職業でも同じ疑問が浮かんだ。その疑問の答えを出すのとすると、私の将来の夢にたどりついた。



私の将来の夢は、海外で働いて、日本と海外を結ぶ架け橋となること。具体的には、まだ決まっていないが、例えば、

通訳者。外国の本を、日本語に訳して、日本に外国の文化を伝えたり、日本のアーティストが、海外巡業をした際、通訳として、両国のコミュニケーションが円滑に進むようにする。

私は今、将来のそういった夢のために頑張っている。英語の授業はもちろん、英語技能検定を受験したり、海外との交流ツアーに参加したりしている。それに、高校も、英語に力を入れているところに進学を決めている。

職場体験を経験したおかげで、将来就こうと考えている職業に、真剣に向き合い、生半可な気持ちで、切り捨てることができた。

日本は今、海外に進出し、多くの国々から認められつつある。そこで、英語が達者な日本人を、これからも増やしていくことが大切になってくる。すると、自然と国内に英語が広まり、簡単な会話程度なら、誰でも話せるようになってくるだろう。そうすると、小規模の店に、外国のお客さんが来店しても、しっかりとした対応をすることができる。そう考えると、一つの結論に至った。

「何年かかったとしても、日本と外国との交流をさらに深め、片方の国の人が、もう片方の国を訪れた際、どんな場所でも親切かつスムーズに、コミュニケーションがとれるような国際関係を築きたい。」

これは、私が実際に友だちに言った言葉だ。職場体験を経て仕事の大変さを実感し、自分の将来を見据えて、現段階で何をすべきなのかを知った。そして、これからの日本のため

に、どういった行動が最善なのかを、冷静になって考えることができた。

よく、「楽しんで稼ごう。」なんて言う人がいるが、楽しんで稼げるなんて、まずありえないし、楽しんで稼いだところで、はたして本当にそれが、自分のためになっているのか考えたとき、自信を持って「はい」と答えられるのか。職場体験に行く以前の私だったら、楽しんで稼ぐことを考えたかもしれないが、体験を終えた今、苦労して給料をもらうという仕事の本質を学んだ私は、自信を持って「いいえ」と答えることができる。それが、私自身の心の成長の証でもあり、経験から学んだ道徳であると考えている。そして、この考えを、私の頭の中だけにとどまらせず、私の身の周りの人間に広めていきたい。

中学二年生という、そろそろ将来について考え始める時期に、職場体験というのは、とても良い機会だった。私は、そこで、多くのことを経験し、学び、考え、それを自分の将来のために生かすことができた。これから先の人生で、たくさんの大きい壁が目の前に立ちはだかったとしても、いつも自分の経験を信じ、壁を乗り越えていく。その心構えで、自分の進むべき道を突き進み、今の目標にたどり着きたい。そのために、今できることに精一杯取り組み、経験をたくさん積んでいきたい。

中学校の部 佳作

夢

愛国中学校 三年

浅井 彩華

私には、小さい頃からの夢があります。それは、看護師になることです。私が看護師になりたいと志したのは私にとって大きな出来事がきっかけでした。

八年前、念願だった妹も生まれ、妹が生まれて一年が経つ頃でした。家族の皆が妹の一日一日の成長が楽しみでした。首がすわって、立つようになり、歩くようになり。そんなある日、妹の歩き方がおかしいと父が異変に気づきました。そして、次の日、病院に行き検査が行われました。検査の結果から妹は化膿性関節炎であることがわかりました。化膿性関節炎とは関節内に何らかの原因で細菌が入り、関節内が化膿してしまう病気です。医師からは一ヶ月の入院と手術をしなければならぬと伝えられました。私にとって妹は初めてできた大きな存在でした。妹に対して自然と守らなければならぬという強い気持ちがありました。だから、入院と手術の一ヶ月間は妹にとっても私たち家族にとっても、忘れられない辛い一ヶ月間となりました。でも、この一ヶ月間で家族が助け合って支え合って、絆が深まったような気がしました。

この、八年前のことをきっかけに楽しいことだけではなく

辛い経験も人生の中で人を変える大切な経験なのではないかなと思います。私は八年前のこの出来事をきっかけに妹から家族から看護師になりたいという夢をもらいました。また、この頃から命のおもさについて考えるようになりました。

そして一年後、妹も元気になり私が小学校二年生になった頃でした。何日か前から歩く際に左足の股関節部分に痛みを感じていました。そして数日後、痛みにたえきれなくなり私は歩くことも難しくなりました。次の日、病院に行き検査が行われました。そして私は股関節炎であることがわかりました。ひどくなると妹と同様に化膿してしまい手術しなくてはなりません。でも私は化膿の一手手前の水がたまってしまった状態だったので安静にしていれば治ると担当医師から伝えられ安心しました。

この股関節炎になったことは私の夢をより大きくしました。歩けなくなり不安でいっぱいだった時期もありました。でも、そんな時たくさんの方が私を支えてくれました。担当医師の先生、何度も何度も声をかけてくれて励ましてくれた看護師の方々、クラスメイト、学校の先生、そして家族。私はたくさんの方に支えられ一ヶ月以上の松葉杖との生活を終え歩けるようになった。小さな出来事が私の夢をより大きくした瞬間でした。この病気をきっかけに仲よくなったあな一人の看護師の方がいました。病院へ行くと励ましてくれて、いつの間にかその看護師の方に憧れていて私もこんな人になりたい。こんな看護師になりたいと思っていました。だから私は看護師になりたいという夢は家族や色々な方々からいただいたプレゼントだと思っています。でも叶えるのは自

分自身です。

この二つの出来事を通して夢を叶えるためには限界を自身で決めないことだと思います。努力が必ず報われるかどうかはわかりません。でも、その努力は絶対に無駄にはならないと思います。努力をして結果が出なかったのなら何度も努力をして挑戦すれば良いと思います。何でも諦めずに挑戦して前に進むことが限界を自分自身で決めないことだと思います。私は、辛くなった時。何もかもがどうにでもよくなってしまう時。自分だけが辛いのではないと思うようにしています。世界中には自分と同じように辛い時でも前に進んでいる人はたくさんいる。このように思うことによって自分だけではない。頑張ろうと思えるようになるからです。

将来、私自身がどんな人になっているか自分でも想像出来ません。看護師になってたくさんの人の支えになって、あの時出会った看護師の方のようになれていれば一番嬉しいです。もしかしたら違う職についているかも知れません。どんな自分でも自分は自分です。一生つき合わなければいけないものだと思います。私は将来どんな自分でも誇りを持てるように今から、最善の努力をして恥じない人間になれるように努力していきたいです。そして、私に夢をくれた家族や看護師の方々、たくさんの人に恩返し出来れば良いなと思っています。

働くことの喜びと達成感

中央区立晴海中学校 三年

遠 藤 佑 香

私は中学二年生の二学期、職場体験として学校近くの老人ホームへ行きました。まだ中学生の私が役に立つかといえば、そうではないかもしれないけれど、自分に与えられた仕事を一生懸命やりました。

そこでの主な仕事内容は、タオルをたたんだり、昼食やおやつを配る地道な仕事や、施設を利用している高齢者の方としゃべってコミュニケーションをとったり、レクリエーションの手伝いをするものでした。これらのことは一見簡単そうで、だれにでもできそうですが、実際に職場体験をしてみても簡単ではない、とても大変なのだという事を思い知らされました。

その中でも私が最も大変だと思ったのは、一緒にしゃべってコミュニケーションをとることです。私は普段から友達としゃべることが好きで、毎日たくさんのかたを話しますが、やはり、同年代の友達と話すのとはわけが違おうようで、とても難しかったです。

まず、大前提として、当然ですが、友達ではない、自分よりも何十年も長く生きてきた人生の大先輩であるということを入念に入念に入れてはなりません。これは、その老人ホームで

働いていて、職場体験として来た私たちの、担当の方にも言われました。しかし、先輩だ、目上の方だと強く思ってしまうと、それはそれで緊張してしまい、話せなくなってしまいうのです。

また、私と、高齢者で施設を利用している方々とは、あたりまえのように年齢が何十歳と違うので、話題を探すのにも苦労しました。私が普段友達と話すようなマンガのことや、音楽のことで利用者の方々を楽しませられないのはあきらかなので、だれとでも話せるような、趣味や好きなものなどの話をしました。

そして、この利用者の方々と話すことにおいて最も大変だったことが他にあります。それは、利用者の方々一人一人の名前を覚えて、性格を理解することです。私がそのとき職場体験をさせていただいた部屋は、かなり大きな部屋で、そこに二十から三十人ほどの人がいました。そんな一クラス分ほどの人数の名前を覚えるのは大変なことでした。しかも、昔の名前は今、私たちがよく聞くような現代風の名前ではないので、漢字の読み

方が難しかったり、あまり聞いたことのない珍しい名前が多く、最初の方は、名前を間違えてしまったり、失敗もしました。それから、一人一人の性格を理解す



ること、これも大変でした。気さくで明るく話しかけて下さる方もいれば、気難しくて、なかなか話をして下さらない方や、おとなしくてレクリエーションなどにも参加せず、静かにしている方もいました。二、三十人も人がいれば当然のことですが、この人はこういう性格だから、こうやって話しかける。あの人はきつと静かにしているのが好きなようだから、そっとしておこうなどと、一人一人の性格を理解した上で行動するというのは難しかったです。しかし、名前や性格を覚えて、一緒に話をして、そしてその人が楽しんでくれると、とてもうれしかったです。

この四日間の職場体験で私は、大変なことをたくさん経験しました。正直明日も行くのか、やだなあと思うこともありましたが。しかし、私と話して利用者の方が喜んで下さって、笑顔を見せて下さると、ああ、頑張って良かった、と思いました。きっとこの仕事に就いている方々は、この笑顔や、頑張った後の達成感のために働いているのだらうということ、を、たった四日間でしたが感じる事ができました。

私は、今は将来の夢というものがありませんが、早く職場体験で感じたような達成感を感じられるようなことを見つけ、それを将来の仕事にできるよう努力したい、と思いました。それにはきっと、この職場体験で経験した苦労や、達成感、喜びなどが役立つのだと思います。勉強や、すべきことをすれば、何にでもなれる。そんな可能性をもとに、これから将来、自分が最も幸せになれる道に進みたいと思いました。

全ては相手を考えて

墨田区立両国中学校 二年

西 本 朱 里

私は、七月八日・九日・十日の三日間、職場体験学習でマクドナルド両国西口店さんへ行って、体験をさせてもらいました。その三日間はある一つのテーマにそって仕事を行いました。

一日目のテーマは“クレンリネス”でした。クレンリネスとは、いつも美しく衛生面の整った環境を作る、いわゆる空間作りのことです。マクドナルドでは頻繁にラウンド（店内清掃）を行います。ちなみにラウンドとはマック用語であり、その言葉には一つ一つ特別な意味が込められています。クロス（ぞうきん）で机やイスをふいたり、サンキューBOX（ゴミ箱）にゴミがたまったらすぐにバックライナー（ゴミ袋）の入れ替えをします。自らラウンドを行うことによって、この仕事をいつもすばやく丁寧に行い、お客様が快適に過ごせる空間を維持しているスタッフの皆様には私は驚くと同時にとても感じしました。

二日目のテーマは“サービス”でした。サービスとは、明るく、大きく爽やかな声で、笑顔を絶やさず、少しの会話でも楽しく話す。このようなお客様を最高の気分させる行動のことです。スマイル0円というおなじみのフレーズの通り、

マクドナルドは非常に笑顔を大切にしている会社です。ですので、私も様々な仕事を行う時も、常に笑顔を意識してみました。すると、昨日と同じ仕事を行っているにもかかわらず、仲間と声かけをし合って今までより早く商品を届けられるようになったり、お客様とも元気に会話できるようになりました。笑顔とは受ける相手を良い気分させるだけではなく、それを行っている側にもパワーを与えてくれる非常に素晴らしいものなんだと気づくことができました。

三日目のテーマは“ホスピタリティ”です。ホスピタリティとは、何気ない心配りや気づかいができる心をもって、お客様をおもてなしすることです。私はそれを意識して、お客様を見てみることにしました。すると、ゴミを捨てようとサンキューBOXに並んでいる女性がいました。なので、私は「もらいます。」

と言ってかわりにゴミを片付けました。すると、女性から「ありがとう。とても助かったわ。」

と言っていただけでした。お客様の気持ちを考えておもてなしをすることができ、それが、お客様にちゃんと届いたことは本当に嬉しかったです。

今回の職場体験学習で学んだ三つのことは、全てがお客様のための行動でした。ただ仕事をこなすだけではなく、どうすればよりお客様に喜んでもらえるかを常に意識しているからこそ、サービス・ホスピタリティ方針になった行動がマクドナルドで働いている人達はできているのだと思います。私もこの三日間で学んだ経験を忘れずに、相手の気持ちを考えて行動したいと強く感じました。

何かを想う気持ち

中野区立第七中学校 三年

大橋 由依

私は、中学二年生の時に、保育園で職場体験をしました。私は、子供と触れ合ったりするのが好きなので、とても楽しみでした。

職場体験は、三日間行われ、一日目は0才児クラス、二日目は五才児クラス、三日目は三才児クラスの担当をしました。一日目の0才児クラスでは、子供の世話や昼寝のための布団の準備などをしました。0才児は、人見知りな子供が多く、仲良くなるのが大変でした。また、まだ言葉を話すことができないので、自分の考えを理解してもらうのに苦労しました。一日目の体験を通して、0才児は、一人一人考え方や感情に違いがあるので、子供によって接し方を変える必要があることを知りました。

二日目の五才児クラスでは、昼食のためのいす並べや、昼寝前のトイレへの誘導など、一日目より仕事が沢山ありました。五才児は、0才児に比べて、人見知りが少なく、楽しく遊んだり、話したりすることができました。また、五才児は外で遊ぶ子供が多く、かくれんぼや鬼ごっこをしました。私は久しぶりに外で遊んだので、とても楽しかったです。そして二日目の体験終了時に二人の五才児に、

「アリガトウ。大すき」

と書いてある手紙をもらい、それが何よりも嬉しかったです。二日目の体験を通して、五才児は、私がいつも普通に行っている書くことや読むことなどが一人のできる事が一番の発見であり驚きでもありました。

三日目の三才児クラスでは、プール入水後に子供にタオルを巻いたり、子供の水着の水気をとって並べたり、昼食後の後片付けなどしました。三才児は、友達同士の意見のくい違いによりケンカが多く、それを止めることが一番大変でした。しかし、三才児は、順番やルールを守れている子供が多くて、とても驚きました。三日目の体験を通して、三才児は、「ヤダ」や「イイヨ」など、自分の感情を友達に出すことができることが分りました。

今回、保育士の体験をして、色々なことを学ぶことができました。例えば、子どもがキレイで快適な環境で過ごせるように、子供達が日頃使っているおもちゃやいす、机などをふいたり、らく書き帳や折り紙、行事で使う小物を作ったりすること、子供達が昼寝をしている間に行く。これらは地道なことですが、保育園で子供を預かっているという責任を感じました。また、ただ子供と一緒に遊ぶだけでなく、



子供達に生活に必要な習慣を身につけさせたり、友達と触れ合う中で、色々な人と共感できる心を育てたりと、様々な役割があることが分りました。

私は、保育園の職場体験で学んだことを通じて、保育士に一番大切なことは、「子供を想う気持ち」だと思います。二日目に五才児に手紙をもらった時、私は嬉しい、と思ったのと同時に、

「私、保育士を体験して良かったな。」

という喜びの感情が生まれました。それは私に、「子供が大好きな気持ち」があったからだと思います。保育士は、「子供を想う気持ち」があるからこそどんなに大変な仕事も乗り越えることができると思います。最後に私は、保育士はとてもやりがいのある職業だということを実感することができました。

三年生になり、家庭分野で、子供の成長について学習しています。先生の話を聞いてみると、

(あつ、そういえば保育園でもそうだったな。)と内容をより理解することができず。なので今とても授業が楽しいです。

私は、将来何になりたいのか。その答えはまだはっきりとはできていません。しかし将来やることは、やはり自分の好きなことをやりたいです。なので、わたしはゆっくり時間をかけて好きなものを見つけて、そのために精一杯頑張りたいです。

栽培の楽しさとその技術

中野区立第七中学校 三年

宮 崎 大 悟

僕が栽培を好きになったきっかけは、小学校のころにやったトマト栽培だったと思う。それは、当時受講していた通信教育セットのふろくについていた、簡単かつ小さなものだった。初めはトマトが食べたくて始めたが、水やりや観察をしていくうちに、トマトを成長させることが楽しみのようになっていった。

そして、ある日ついに花が咲いた。毎日水をあげて待ちわびていたため、その達成感は大きかった。そのキットにはトマトの実を四角くさせるカバーもついていたので、小さい実ができた後にすぐカバーをつけた。実が熟して、四角い実ができたときはとても驚いた。それまで四角いトマトなんて見たことがなかったので、珍しく思い、食べる気もなくなってしまうた。

トマト栽培が終わった後も、もっといろいろな植物を育ててみたいと思った。

中学校に進学したときに、部活動説明会で生活研究部という部活に目をひかれた。その部ではものづくりを中心に、梅やサツマイモなどの植物栽培を行ったりしていた。中学生になっても植物の栽培はやりたかったので、僕はその部活に

入った。

活動内容はやはり、ものづくりが主だったが、五月になってサツマイモの種イモを植える作業もあって、楽しい部活だった。十月になって、育ったサツマイモを掘り出して収穫することになった。最初は「大きく育てていけばいいな」と思ってた土を掘っていると、普通の大きさのサツマイモにまじって、バスケットボールほどの大きさのサツマイモが出てきた。そのサツマイモはあまりにも大きかったため、掘り出すのがとても大変だった。巨大なサツマイモはその珍しさから、しばらくは食べられず、校内に飾られていた。普通の大きさのサツマイモは家に持って帰り、焼きイモにして食べた。部活といえども、自分で育てたサツマイモは甘く、とてもおいしかった。

中学校二年生になって部活以外に授業でも植物の栽培をするようになった。小学生の時にやったトマトの栽培とは違って、肥料を使ってより本格的に栽培することになった。僕はそれまで、肥料は一度与えたら、それだけで植物が成長するのかと思っていた。しかし、実際に授業でやり方を聞いてみると、一度肥料を与えて植物がある程度育ったら、もう一度肥料を与えて成長を促す「追肥」というやり方を知った。

授業で実際にやってみたが、肥料の量の調整が難しく、なかなか上手くいかなかった。時々、農家の人はこの難しい作業を毎年やっていて大変だなあと思いつつ作業をしていました。

三年生になって、またサツマイモを育てる時にも植物栽培で、新しく知ったこともあった。サツマイモを育てるときに

種イモを土に埋めるのはもちろん知っていたが、サツマイモの茎を地面に植える「つぎ芽」という方法は知らなかった。つぎ芽は地面に植えた芽が直接成長してサツマイモを作る、という方法だ。しかし、僕は先生の説明を聞いて、茎を植えても「本当にこのやり方で育つのか」という不安は消えなかった。そのため、数ヶ月後に様子を見て、サツマイモが生長していたときは本当に驚いた。

僕はこのような経験を通して、植物を栽培することが好きになった。植物を育てるときに、野菜や果物であれば、実がおいしくなるように、花であれば、きれいに花が咲くように、様々な工夫をして成長させるのが植物の栽培の楽しいところでもあり、難しいところだと僕は思っている。

植物を上手に育てる方法はこの文で紹介した物以外にもたくさんある。そしてそれらは、人が長い間をかけて培ってきた技術の結晶だといえる。僕もそれらができるだけたくさん知って、それを後世に伝えていきたいと思う。

校外講座で理科と技術科を学んで

北区立稲付中学校 三年

高 谷 直 希

僕は工作が大好きで、小さいころから作品作りを楽しんできました。空き箱工作に始まり小学校高学年になると、「大人の科

学」という雑誌で電子工作を始めた。僕にとって工作はただの制作ではない。材料を集め、試作し、問題点を見つけ、評価する過程で、材料や知識と出合う場、そして同じ思いを共有する人との交流の場だ。

毎年夏休みには様々な理科工作講座を楽しみにしてきた。理科と工作は関わりが深く、その原理を知ることが工作のいいネタになる。昔から人間は、科学の仕組みを道具という仕掛けに換えてきた。身の周りのモノや道具は理科のネタであふれていることをそれらの講座から学んだ。

小学五年生の時、アクリル棒が屈折する原理を理科の先生から教わり、太陽光をアクリル棒で室内に送り、照明にする装置を作った。それは北区のアイデア工夫展努力賞を頂いた。小学六年の夏休みは、ベランダで風力発電ができないかと思い、インターネットやイベント会場で情報収集し、専門書も買い込み、試作を繰り返し続けた。泣きたくなくなるほどの試作時間と材料費を費やした作品は、自然風でLED球一つを点灯させるのが精一杯だった。上位入賞を目指し意気込んで始めたネタは、入賞にも届かなかった。難しいテーマを選びすぎたかな、と自分の技量のなさとも気づくの大変さを味わった。

中学一年生になり、図工は美術科と技術科に変わった。自分らしさを作品にすることは美術科に向けられ、技術科では、簡単なキットが制作の中心になった。工夫する余地がない物足りなさを感じ、工作は中学義務教育では、あまり評価されないのかもしれないと疎外感を感じた。その反面、校外講座では充実した経験を多く得るようになった。小学生向けでは

対象学年が広く、実験の結論に時間がかかり、物足りないこともあったからだ。

中学一年で参加した東京ジュニア科学塾は工作に偏りがちな僕の考えを変えるきっかけになった。ノーベル賞を受賞した白川さんの講演、伝導性ポリアセチレンという素材が電子部品の発展につながったこと、無人深海探査機「江戸っ子1号」見学の際は、説明を聞くだけでなく、電池について、性能や問題点を開発者と直接話すことができ、とても感激した。ベランダ風力発電の苦い経験は、この時少しだけ活かされたと感じた。

そしてこの時、「最先端技術は学校の外にある、本や学校で身に付けた知識は校外講座の理解に使おう」とひらめいた。義務教育で、工作が軽視されているのではなく、これら校外講座は追加授業なのだ、そう解釈すると、学校の授業が違いうものに見える。

中学二年の夏休みはすごい夏休みとなった。少し大げさかもしれないが、将来やりたい職業像が少し見えた様な、そんな機会を得た



のだ。きっかけは、都立産業技術高専が夏に開催した小中学生向け講座だった。応募から外れることを考慮に入れて五、六講座も申請したが、そのほとんどが受講可能となり、工業高校の講座と併せ、その夏は理科と技術科の特別授業三昧となった。

それらの講座のどれもが素晴らしかった。中でも都立産業技術高専品川キャンパス電子工作講座「光センサーでLEDの光り方を調節…」は、僕の欲しい情報にヒットした。当時「XBE」という無線通信の設定に行き詰っていたからだ。受講がよい経験になったことは言うまでもない。机上の勉強があまり得意でない僕が、その講義の時間はあつという間に過ぎ、一日だけでは物足りないと思った。

講義終了後に講師の先生へ質問に行ったところ、後日、快く指導をして下さり感激した。高専の先生は、僕が参考にしていた本から誤りを見つけ、それが原因で接続設定が出来ないことを簡単に突き止めた。独学では解決策を特定するまでに時間を無駄に使う、専門的に学ぶ環境が必要だと感じた。

通信設定がうまくいくと、それをネタに工作がしたいと思った。そこで距離センサーと水滴センサーを搭載した「雨から洗濯ものを守る、ベランダ用巻き取りカーテン」構想を練り、その作動実験を自宅で行った。

装置の構想を技術科の先生に相談すると、技術室で作業をすることを快諾して下さり、工具や材料を自由に使わせてもらうことができた。家での作業は、はんだゴテのコンセントやネジ等小さな部品の保管に気を遣わなくてはならないが、技術室ではそんなことを気にせず、思う存分制作に取り組めた。

夏休み終了後、北区工夫展に出品したが、応援して下さった技術科の先生に良い報告ができなかったことが残念だった。嬉しかったこともある。会場で出品作品の修理をしていた技術者が、僕の作品について「カーテンが巻き取られセンサーまでの距離がゼロになるとモーターの電源が切れる点がよく考えてある」と評価して下さったことだ。こだわった機構が評価され本当に励みになった。

中学三年になった今年五月、技術科でクラスの担任になった先生に、やっと良い報告ができた。北区と都立産業技術高専荒川キャンパス主催の中学生ロボットコンテストで準優勝したからだ。先生にはとても感謝している。

中学三年の夏休み、僕はもう工作に明け暮れてはいない。恒例の校外講座は産業技術高専の2講座に絞った。将来は質の高いモノづくりを仕事にしたい。そのために加工技術を学びたい、プログラムの知識を得たい、得意でない机上の勉強をその気持ちで支えている。

勉強の合間には、電子工作を少しだけ…。先日、ライト・気温・気圧・高度と三軸加速度センサー内蔵の腕時計が出来上がった。あとは、格安で3Dプリンターを使わせて頂ける施設はないかなあ。時計をはめ込む本体が出来上がれば「Nウォッチ」完成なのだが…。

物作りが夢に

練馬区立開進第四中学校 三年

安部 葉南

物作り、と言ってもいろいろありますが、私は学校では習わない物作りを経験しました。そして、その物作りが今は私の夢となっています。夢をつかむチャンスとなった企画は学校で配布された手紙の中にありました。

中学一年の夏、中学生のための情報番組製作ワークショップという文字を初めて見たとき何も思いませんでした。しかし、概要を読み進めていくうちに何かひかれるものがありました。たまたま父の出身大学で行なわれている、ということもあったので応募してみることにしました。

そして迎えて初日、練馬区内の中学生二十人ほどが小さなミーティングルームに集まりました。名前も知らない、聞いたこともない学校の中学生が二十人。これから本当に番組を作っていくのだろうかとか心配になりました。初日には主催者の講義の後、簡単な流れについて説明を受けました。主催者や大人の人々は皆、すぐに仲良くなれるから大丈夫と言っていたけれど、その場にいた中学生のほとんどはその言葉を信じていなかったでしょう。私もそう思っていました。初日だけでも誰とも話せずにいるのに。共通の話題が何かさえも分らないのに、不安ばかりが多く積み上がりました。

二日目は自分達が考えた企画について発表する日でした。

練馬区の疑問、気になることについて、というタイトルで一人一人が取り上げた話題について発表し合いました。この企画会議で選ばれた四つの企画は本当に取材し、三分ほどの映像に編集し最終日に行うスタジオでの収録で使われます。自分の企画を通したい、と全員が思ってたので、発表のスタイル、テーマの目のつけどころ、企画書に工夫を凝らすなど様々なスタイルがありました。また、この企画会議では他人の発表を聞いておかしなところはないか、ほんとうに映像化できるのか、中学生が取材できるものかを考え質問したり、改善案を出したりして企画をより確かな物に変化させていきました。他人に質問したり反論したりするときは本当にそれが正しいのか、今話題とされている議題に合っているのか、などと慎重に考えながら意見を出しあっていきました。最初は意見がなかなか出ずにとまどってしまいうこともありました。時間が経つにつれて活発に意見が出されるようになりました。もう他人とは呼べない、つまり一つのグループとなっていく、そんな瞬間を味わった気がしました。こうして企画会議が無事終わり四つの企画が決定し取材、編集へと進んでいきました。残念ながら私の企画は映像化されることはありませんでしたが、通った四つの企画のうちの一つに入り、思う存分楽しむことが出来ました。

物作りには多くの種類があります。一人で木工工作进行了り何人もの多国籍の人が一つの飛行機を作ったり。私も同じ企画のメンバー、主催者の人々、取材に答えてくれた人々皆で一つの映像を作る物作りを体験しました。多くの人が関われ

ば関わる程、内部で意見が大きく割れたり方向性が見えなくなったりしていきます。その中で自分はどのような意見を、意志を持っているのか、ということを考えることが大切なのだ、と気付かせてくれるワークショップでした。大人数で行動したり何か一つのことを成しとげることは大変です。しかし私はそれが楽しいと思えました。企画会議で起こった笑い、取材をした人との会話、企画のメンバーと交わしたコミュニケーション全てにおいて、やりがいを感じ、楽しさを味わうことができました。

ソーシャルネットワークが発達した世の中では多くの人々と繋がる人が多いですがパソコンなどの画面と向き合う孤独な時間が増えてきていると感じます。また動画などを作るときも一人、誰かに向けてコメントを発するときも一人。どこかの誰かと繋がっているのかもしれないけれど結局、単独行動になってしまう世の中です。そんな時に大人数でわいわいと騒ぎながら一つのことを成しとげる喜びを味わえた事は大変貴重な体験であり良い経験になりました。ワークショップを終えた一年生の夏、私はメディアに関する仕事に就くと決心しました。多少のリスクはあるかもしれませんが自分の意見を持ちつつ多くの人の意見を聞き入れる仕事につきたいと思ったからです。その思いは二年たった今でも変わることはありません。

物作りをすることによって完成した達成感を味わえる事はよくありますが、夢に変えるという発想はなかなか考えられないと思います。この体験談をもとに物作りの大切さと重要性を多くの人に考えてもらえればと思います。

職場体験から学んだこと

足立区立第六中学校 三年

高橋 美咲

私が中学二年生のとき、小学校へ職場体験をしに行きました。私は将来小学校の先生になる道にもあこがれがあったので、とても良い機会でした。そこで学んだことがいくつかあります。

一つめに、小学生といっても小学一年生から六年生と、非常に幅広い年齢の子供たちに合わせて対応を変えることができる応用力がなければ難しいということです。例えばこんなことがありました。小学一年生のプールの授業で一人の男の子がプールに入りたくないと泣いていました。こんな状況の中、私はどうしたら良いのかわからずあたふたしていると、優しくした印象のその子の先生が、私でも怖くなるくらい怒ってプールへつれていきました。自分は正直やりすぎなんじゃないか？でも、こうしなければその子のためにはならないんだよねあと色々な感情がわきおこってきました。そして私はこれを見て、ちゃんとしかってあげるといのは本当に大切なことなんだなと思われました。けれど、それと同時に、もし自分が将来先生になったとして、あの先生のように厳しくしかってやることができるのかな……、と不安になりました。きっと、あの先生が泣いていた男の子に最後まで優

しくなだめていては、次のプールも、その次のプールも入りたくないといって駄々をこねていたことでしょう。仕事をするにあたって、時には心を鬼にすることが出来る人になるのもとても重要なことのひとつなのだ学びました。

二つめに、この仕事は本当に心の底から子供が好きで、子供のためなら自分の時間なんておしまない！というような人にしか続けていけることなんて無理だろうということなのです。自分の担任でもあった先生にインタビューをする機会があり、この仕事をしていて一番の喜びはなんですか？とたずねると

「児童が解けない問題にぶつかってしまった時に、自分がアドバイスなどをして、わかってくれた瞬間の表情や、ありがとうという言葉をもらった時だね。」

と答えてくださいました。教える、というのは自分が勉強することよりもずっと難しいことではあるけれども、その先にはこんなうれしいことがあるんだ！と小学校で働くことにどんな興味もわいてきました。もちろん働く人の朝は早く帰りもおそいし、責任だって中学生よりもずっと重いことはあるけれど、自分の好きなことを職にすることは、自分にとってもものすごくステキなことだと感じました。

あの三日間を通して、私の仕事に対する印象は大きく変わったことを覚えています。職場体験をする前の自分は正直、責任が重くなる社会人っていやだなあ、自分が大人になって仕事をしている姿なんて想像もつかないや……、このまま学生生活が続けば幸せだろうなと思うことが多々ありました。けれど、職場体験をしたあとは、もちろん大変だったけど一

つ一つ仕事や問題を解決したあとの達成感ややりがいには中学生の仕事のやりがいとは格段にちがっていても楽しかったです。私はこの体験をしていなかったら、もしかすると社会人になるまで働くことに対して嫌悪感をいだいたまま過ごしていたかもしれません。そう考えると背筋がゾッとしました。人のために一生懸命になって働くことの辛さと楽しさ、そして百円を稼ぐということもとても大変なのだと思ひにしてみてもわかりました。これから先自分の就きたい職業をみつけたときに困らないためにも、より一層勉強して力を注いでいきたいと思います。



ものづくりを通じて作る未来

足立区立第六中学校 三年

辻村 茉緒

中学生になり、技術を学ぶようになってから、材料と加工に関する技術、エネルギー変換に関する技術、生物育成に関する技術、情報に関する技術など、様々なことを学んできました。様々な技術を学んできた中で、二年生の時にLEDあんどんを作ったことがとても印象に残っています。LEDあんどんを作った時に、何かを作ることが楽しいと思いました。そして技術の授業がさらに楽しみになるようになりました。父の仕事が空調換気設備工事の仕事なのもおそらく関係しているのですが、昔から様々な機械や工業に興味がありました。小学生の時には祖父と一緒に使えなくなったラジオ等を解体して遊んだりもしました。中学校で技術を学べると知り、楽しみになるとてもわくわくしていたのを覚えています。

中学校で技術を学習して、技術は様々なことと関わっていることを知りました。普段の生活の中にも技術で学んだことがたくさんあることに気付かされました。そして、技術は重要な教科なのだと思います。

中学生になり、高校を調べていて、産業技術高等専門学校という高専があることを知りました。そして、産技高専ではものづくりに関することが学べることを知りました。産技高

専では様々なコースがあり、将来技術者になりたい人達が集まっています、五年間学習することが分かった時、技術や工業に興味があったことと、色んなことを知ったり学んだりすることが好きだったので、産技高専に行きたいと思いました。

産技高専に行きたいと思い始めたある日、私は将来の夢を見つけました。前から将来は誰かを助けることができたり、笑顔にできるような職業に就きたいと思っていました。そして、どんな職業に就けば誰かを助けたり笑顔にすることができるとか考えました。色々考えていた時、杖をついている男性を見かけました。周りを見渡してみると、杖をついている人や車椅子の人が少なからずいることに気が付きました。その時、体の不自由な人や高齢者がもっと不自由なく、快適に過ごせるような社会にしていくなれるような仕事に就きたいと思いました。そして、祖母のために階段をのぼる時、楽にのぼれるような機械を作りたいと思っていたことを思い出しました。また、産技高専には医療福祉コースがあることも思い出しました。

医療福祉コースについて調べると、私がやりたいと思っていました。産技高専のものをづくり科学教室で「身体の電気信号で動く福祉機器」という講座を受けました。その日、身体に流れている電気信号を使って動かす福祉機器があることや、脳波を利用した義手やパソコンを操作する福祉機器があることを知りました。医療福祉コースについて調べていたので、義手等を学んでいることは知っていたのですが、義手等以外にも様々な事を学んだりしていることを知りました。また、義手や義

足には様々な種類があることを知りました。そして、まだまだ多くの課題があることも知りました。

この日から、将来は義手や義足等を作れる義肢装具士になりたいと強く思うようになりました。義肢装具士になり、手や足を失なってしまった人達が、より過ごしやすい日々を送れるようにしていきたいと思っています。そして、より多くの人を笑顔にすることができたら良いなと思っています。これから様々なことを学んでいく上で、義士装具士になりたいという夢がもしかしたら変わってしまうかもしれませんが、人は日々成長してゆき、考え方などもどんどん変わってゆくので、未来の自分は今の夢とは違うことをしているかもしれない。しかし、昔から思っていた誰かを助けたいと思う気持ちや、誰かを笑顔にしたいという気持ちはこれからも変わらないと思います。そして、ものづくりを通じて、多くの人が不自由を感じない社会にしたいという思いも変わらないと思います。将来どのような職業に就いているか分からないけれど、今は自分の夢や目標に向かって頑張っていきたいです。

作物を作り育てるということ

葛飾区立堀切中学校 三年

木村 真夕

技術の時間を通して、二年生の時には大根、三年生の時にはトマトを育てることを学びました。最初は、『どうして技術の時間に作物の栽培をするのだろう。』と思いました。それは、私の中でこのような授業は、理科の分野だと思っていたからです。でも、どのように育てると丈夫に育つのかを工夫したり、創造したりすることは、突き進んで考えていくと栽培技術という分野にも行きつくのではないかと実際に栽培しているうちに思うようになりました。

私は作るという作業が好きです。何もないところから始まり、工夫をしたり、時には失敗を重ねたりしながら少しずつ形になっていく過程が楽しいからです。失敗をしてしまった時にはとてもショックで悲しいけれど、そこから得る物があるということも物作りの素晴らしいところでもあると思います。

一口に作物を作り育てると言っても、ただ種や苗を植えて水をあげればいいというものではありません。種ま



きや苗を植えるにしても、大根とトマトでは生育適温が異なるのでそれぞれの作物にとってよりよい時期に植えるのが好ましいのです。日照の問題や間引き、肥料のことなど、気にかけてはならない事はたくさんあり、大変と感ずることもありましたが、だからこそ手をかけなければならぬことの大切さも分かり、ほんの少しの成長でも嬉しかったりもしました。又、普段土に触れる機会もほとんどないので、触った土の感触が心地よかったのを覚えています。しかし、自分の葉の成長と周りの友達の葉の成長を見比べて、自分の方が成長が遅かったり、葉の色が黄色くなってきてしまったりすると、きちんと実になるんだろうかと心配になることもありました。物を作る前には、一見すると簡単そうに感ずることも、実際に自分で作ってみると、予想通りにいかないことや、心配事も出てくるものだなと思います。

今までの技術の物作りと違うことは、対象が生きているという事です。小学校の時には朝顔やひまわりなどを育てましたが、中学校の技術の時間に再度やることで、小学校の時よりさらに細かい知識を身に付けることが出来ました。トマトは自分達で食べましたが、大根は家に持って帰りました。母に見せると、小ぶりではありましたがきちんとした大根が学校で作れることに驚いていました。冬だったので鍋料理に入ってくれて、とても美味しいと言ってくれました。その瞬間、私は家族のために作ることの喜びを感じました。

大根を栽培する授業は、作物についてより興味を持つきっかけにもなりました。大根は品種の多さ、生産量ともにトップの野菜で、「桜島」、「守口」など土地の名前がついている

品種もあるそうです。今では葉はついていない状態で売られています。根、茎、葉全部食べることが出来るそうです。いつも食べている白い部分が根っこだということを知った時には驚きました。

作物という言葉聞いて頭に浮かんだ事があります。それは、日本の農業従事者の平均年齢は六十六歳で、高齢化が進み農業を仕事としている世帯が年々減ってきているということです。それと同時に、若い人達は田舎暮らしを嫌い、都会に出て行ってしまいう状況が続いています。国土が狭いという問題もありますが、日本の食料自給率は三十九%しかありません。しかし、最近は大勢の若い人達が農業の分野に進出していると言われます。例えば、より甘いトマトの生産に向けての研究や、『日本一美味しいお米を作るぞ』という若いパワーが農業を活気づけているのです。若い人達が今までとは違った目線で新たな技術を開発し、品種改良も盛んに行われるようになると、狭い土地でもたくさんの作物を作れるようになる日が来るのではないかと思います。

大人になってからいきなり農業の分野に進む人は少ないと思います。小さい頃の体験、例えば今回の大根やトマト作りの経験が、その道に進む一つのきっかけになることもあるのではないのでしょうか。そういう意味でも中学校の技術の授業で、このように種や苗から野菜を作り、土と触れ合うことの楽しさや、命あるものを育てる責任感を学ぶことは、とても勉強になりました。高校でこのような授業を行うのは、限られた専門の学科のある高校だけだと思うので、中学校で全員が体験出来たことは、とても貴重な経験だったと思います。

高等学校の部 最優秀賞

あの看護師さんのような看護師に

愛国高等学校 三年

鯨井 未来

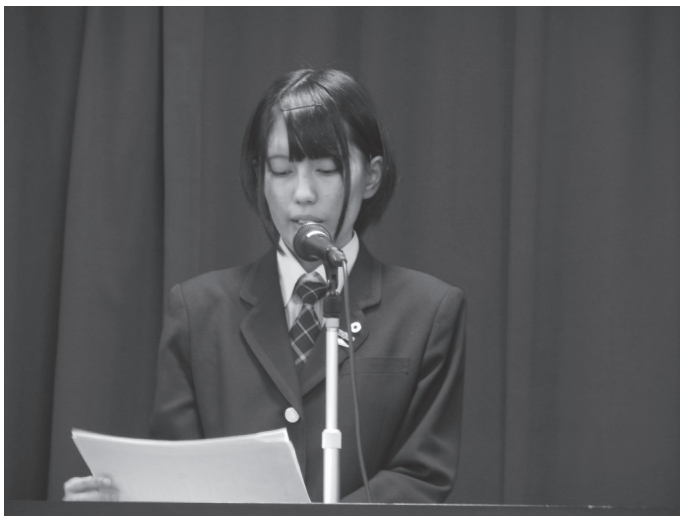
「ママの心の中には忘れられない看護師さんがいるんだ。未来にもそんな看護師さんになって欲しい。」

看護師になりたいと将来の夢を語った私に母が言った言葉です。母の忘れられない看護師さんとは、兄が通院していた病院の小児科の看護師さんのことです。

兄が病気を患っていることが判明したと同時に、私が母のお腹に宿っていることも判明しました。兄の病気は遺伝性の疾患だった為、また同じ病気の子供が生まれたら……と家族全員に反対されたそうです。子供は生みたい、でも生まれてくる子供が病気を患っていたら育てていけないのだろうか、家族全員が反対している中で生むことはできるのだろうかと不安でいっぱいだったそうです。兄の主治医に相談したときに側にいたのがその看護師さんでした。その時黙って話を聞いてくださり、後日病院で会う度に励ましの言葉をかけてくださいました。ある時、一冊の本をプレゼントしてくださったそうです。それは障害のある子供を育てている芸能人の本でした。その本の最後のページには「生まれてくる子はお兄ちゃんやお母さんのことを助けてくれるはず。だから何があっても

も頑張って。」と手書きのメッセージがあったそうです。その看護師さんの言葉があったから出産を決意することができたと言っていました。その話を聞き、私もその看護師さんのようになりたいと強く思いました。

高校の衛生看護科に進学した私は現在三年生となり、臨地実習が始まりました。実習では実際に患者様を受け持たせて頂きました。学校で習った知識や技術を活用し、患者様の容態に合わせた個性のある看護を提供しなければなりません。学校で学んだことを実践にどれ程活かせられるだろうかという期待と不安が入り混じった気持ちで胸に実習に臨みました。私が受け持たせて頂いたA様は、手術を終えた直後の患者様でした。手術後は創傷の痛みが強く、歩くことさえままなりません。だからといってベッドに臥床したままの状態だと、筋力低下をはじめ様々な合併症を招いてしまいます。私は術後の観察項目や援助の際の注意点などを調べ、いかに患者様に安全・安楽なケアを提供できるかを考えました。



高等学校の部 最優秀賞 鯨井未来さんの朗読

実習が始まり数日経ったときのことです。患者様の元へ訪室し、情報収集も兼ねてA様とお話をしていました。情報収集といっても尋問のようなものではなく、会話の中からご家庭での生活などを知るといいうものです。その会話の中でA様は次のようにおっしゃっていました。

「手術の傷の痛みが治ることは頭では分かっているのに、どうしても不安になってしまっていて駄目ねえ……。」

その言葉を聞いて、私は母の話を思い出しました。温かい言葉で母を支えた看護師さん。その話を聞き、患者様の心に寄り添うような、頼りがいのある看護師になりたいと思った私。今の私はどうでしょう。身体的な問題については二の次とえ、A様の抱く不安など精神的なことについては一の次となっていました。看護の対象は「疾患」ではなく「患者様」です。失敗を避けて物事をうまく進めようとしていた私は、本質を見失っていました。それから清浄や排泄の援助に加え、A様の不安が無くなるようにとどのような経過で回復していくのかを説明し、A様が順調に回復していることを伝えました。また、少しでも安心できるようにとA様の手を握りながら不安や悩みを傾聴するよう努めました。そしてA様が退院する前日、

「学生さんの温かい手と、温かい言葉と、温かい対応で不安が和らいだの。ありがとう。」とおっしゃっていました。その言葉を聞いて、私はA様の心のケアもすることができたという達成感と、憧れの看護師さんに少し近づけたことへの喜びを感じました。

看護師には知識と技術が必要不可欠です。疾患や症状、検査、

治療、それぞれにどのような看護が必要かを知っていなければなりません。その知識や技術で、患者様の身体だけでなく心のケアもすることが看護師には求められます。身体的な看護については勉強すればするほど身につくと思います。しかし、精神的な看護についてはいかに患者様の立場で考えることができるか、患者様の気持ちを理解できるかが重要になると思います。これから沢山のことを学び、経験を積んで心の豊かさを育んでいきたいです。そして将来、母の心の中の看護師さんのようにいつまでも「この看護師さんに会えて良かったです。」と思って頂ける看護師になりたいと思います。

高等学校の部 優秀賞

大きくなれた私

東京都立農芸高等学校 三年

鈴木 晶 葉

「何かに一生懸命取り組んだ後、当たり前のことをするといつもより特別に感じる。特別に感じるって、本当に難しいことなんだよ。」この言葉は私が五日間牧場実習でお世話になった農家さんから言われた言葉だ。

私は、将来動物関係の仕事に就きたいと考えていることから、今年の夏、牧場での実習にチャレンジした。

牧場実習なんて今までやったこともないし、どんなことをするのか分からず、とても不安だった。最初は、失敗や迷惑を掛けないようにすること、そのことだけを考えていた。

初日、仕事を覚えるのに必死で周りなんて見えていなかった。その上、牛を目の前にすると恐怖心があり、集中できなかった。牛は人間の言葉なんて分からないし、牛が何を考えているのか人間が分かるはずがないと心の中で思った。私はのちにそれが間違いだと感じる。二日目、仕事を覚え、前よりもスムーズに作業ができるようになった。しかし、思いもよらないことが起きた。今年の夏はいつもより一段と暑く、猛暑だった。牛は元々寒い場所が得意であるため、暑さは苦手である。そのため、猛暑で具合が悪かった牛が死んでしまった。ほんの少し前まで目の前で生きていたのに。悲しみと脱力感でいっぱいだった。これまで多くの人が、この牛に関わり、育ててきたのに。始まった命はいつか終わる。そう分かっているにも命の重みをすごく感じた。

経験を積んでいくうちに、牛に対する気持ちが変わっていることに気付いた。恐怖心があると牛も人間に恐怖心をもつ。そのことを知ってからは、なるべく牛に触れ合い、話しかけた。私も牛も恐怖心がなくなった。牛と人間がコミュニケーションを取ることもなれてきたと思う。しかし、それは大きな間違いだと気付いてからは、仕事にも集中でき、今までの倍以上、実習が楽しくなった。集中して力が入りすぎて手はまめだらけで痛かった。そのことを農家さんに言う「まじめに取り組んでいる証拠だよ」と言われた。確かに、勉強すれば手が痛くなり、運動すれば体のどこかが痛く

なる。この手の痛みは喜びなんだと思った。さらに、私は初めておいしさに喜びを感じた。お世話になっている牧場の牛乳で作っている自家製アイスを食べた。多分、普通はアイスを食べた時、ただ「おいしいなあ」と思うだけだと思う。しかし、汗をたくさんかいて、手が痛くなるまで掃除をした後に食べるアイスは格別だった。今まで、こんなにもアイスがおいしいと感じたことはなかった。大げさかもしれないが、素直にそう思った。一生懸命に取り組んだ後、当たり前のことをすると特別に感じるということは、このことなんだと分かった。当たり前のことを特別に感じることはとても難しいことだ。この先もそう感じることはあるのだろうか。そう思うと少し寂しくなった。けれども、何をやるにも一生懸命に取り組んでいこう。そう思うことができた。

五日間、長時間の作業は大変だった。しかし、作業が終わった後は、楽しい疲労感でいっぱいだった。楽しい。そのように自分が思える理由を考えた。自分は動物が好き。確かにそれもある。でも好きだけではできない作業もあった。振り返ってみたら、実習中、たくさんさんの会話で溢れていた。作業中は個々の仕事があるため、しゃべることはなかった。けれども、仕事が一段落ついたら、学校のこと、部活のこと、家族のことなど、農家さんとたくさん話をした。自分のことを話すのも楽しかったし、私が知らないことや牛について聞くこともっと楽しかった。私は話すことはできなかったが、ある日、遠くから見学に来た人と農家さんが色々な話をしていた。農家さんは、質問に答えるだけでなく、見学に来た人の話に耳を傾け、逆に農家さんが質問していた。だから、話が盛り

上がるんだと分かった。会話が人を元気にしてくれることを実感した。私は、この会話があったからこそ、つらい作業を乗り越えることができ、楽しいと思うことができた。

私は、五日間の実習を通して、自分が実際に体験しないと分からない大変さ、嬉しさ、悲しさに触れることができた。少人数でたくさんの牛の世話をすることは大変だ。それでも一頭一頭大切に育て、愛情に溢れていた。牧場に勤めている以外の人も牧場には多く関わっていた。表からは見えなかったけれど、獣医の先生、エサを運ぶ人、大学の先生、家族。こんなにも多くの人が協力していた。

今、私たちが飲んだり、食べたりしているもの全てにおいて動物の命をもらっている。毎日、ご飯を食べられるのは当たり前ではなく、多くの人や多くの動物、植物によって支えられて生きている。食べる前の「いただきます」、食べた後の「ごちそうさま」は、動物や植物への感謝の気持ちが詰まっている。必ず言うべきだ。

私は、今回の牧場実習を通して成長できたと思う。仕事に対する大変さや、命の大切さなど、多くのことを学ぶことができた。私は、これから牛のように大きく成長していきたい。



畜産を学んで

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

五十嵐 香月

みなさんは畜産についてどういう印象を持つでしょうか。動物たちと触れ合えて楽しそうと思うでしょうか。動物を殺したりするからいやだと思うでしょうか。人それぞれいろいろな考えを持っていると思いますが、中には、あまり良い印象を持っていない人もいるのではないかと私は思います、それは私がこんな体験をしたからです。

瑞穂農芸の畜産科に入学して私はたくさんの動物と触れ合いつても充実した学校生活を送っていました。とても楽しくて両親や中学の時の友達にたくさん自慢していました。そんな私に入学してから初めての壁が立ちました。それは、ブロイラーという肉用種の鶏の飼育と、と畜・解体です。肉用種の雛を自分の担当として一羽を決め、みんな名前をつけて可愛がりました。私も雛に「セロリ」という名前をつけて大切に育てました。セロリたちの成長とともに、気の重い、「と畜」の日が来ます。とうとう「と畜」の日が目前にきたころセロリたちは「ヒヨコ」の頃の面影が無く、大きく成長していました。黄色かった毛の色は真っ白になり、細かった脚は「脚」についている「脚管」が食い込むほど太くなっていました。

いよいよ解体の時がきました。エプロンとマスクを付ける準備が終わり、一人目の生徒の解体が始まりました。かごの中に入れられて順番を待っていた鶏たちが少しずつ減っていききました。鶏たちも殺されるのを分かっているかのようにあばれだし、私がセロリをゆっくり抱き上げるとセロリもあばれて私のうでを爪で引っ掻いてきました。

私はセロリに「わかってているのだね、痛みがわからないようにするからね」と声を掛けてセロリの首を鋭く研がれた刀で切り裂きました。放血器に入れるとバタバタと暴れ、しばらくするとセロリは動かなくなりました。セロリは私が殺したのです。解体作業を終え、いつもお店で見るような部位にして家に持って帰ると、両親は頑張ったねと褒めてくれました。その夜、食卓には鶏肉料理が並び、両親からの暖かい言葉とともに「命をいただく」夕食となりました。

二年になり、一年時よりたくさんのお出来事がありました。牛の出荷、食肉市場の見学、牛の出産そして死。楽しいことも辛いことも学びました。ある時、家族で焼肉を食べに行った時のことです。牛の舌の話になり私は自慢げに話しました。「牛の舌は結構大きいんだよ。」「猫みたいにザラザラしていて、舐められると痛いんだ。」私はどんな反応が返ってくるのかなと期待していました。答えは「そんなこと今聞きたくないよ。」でした。私は何も言えなくなりました。父が私をかばうように「でも、そういう勉強をしているんだもんね。」と言うと兄は「知っているけど、言わなくて良いことは言わなくて良いんだよ。」と子供に言い聞かせるように私に言いました。私は私だけでなく畜産を馬鹿にされた

ように感じて怒りと涙が込み上がりました。更に、とどめをさすように姉が「鶏殺したのによく肉とか食べられるよね。」と言いました。私は悔しくて、悔しくて怒りが止まりませんでした。ただ牛のすごさを伝えたかっただけなのに、好きで殺したのではないのに、と思いました。私はその時やっぱり畜産に良い印象を持てない人が多いということを感じました。

思い出してみると、中学の時、動物とか臭いし汚いから嫌いという人や、鶏殺すのでしょと馬鹿にしてくる人がいました。しかし私は畜産を学んで動物が大好きになりました。その分、辛いこともたくさん経験することになりました。

校外見学の授業で品川にある食肉市場を見学しました。ここでは、牛や豚を解体し、枝肉に加工してセリにかける卸売市場の役割を担う施設でした。解体の現場では多くの職人の方が手際よく衛生的に解体を進めています。私たちの行った鶏と違い、牛は大きく血の量も黒いほど流れ出ています。私は、この作業があつて、私たちの大好きなお肉が食べられるのだと思いました。きっと辛い仕事だけれど、肉を生産するために真剣に取り組んでくださっていることに感謝しました。ところが見学していると、解体の作業に従事している者への偏見と差別があるという説明や展示物がありました。私は前にもあったように怒りと悔しさがこみ上げてきました。

私は、畜産は誰もが出来る仕事ではないと思います。動物に愛情をそそぎ、生死を見守り食料を生産し暮らしを豊かにする仕事。技術や知識に加え、家畜と共に歩めることが求められる厳しい仕事であることを学びました。誰もが出来る仕

事ではないからこそ私は畜産という仕事に就きたいと思いました。今の私にできるすべは一つ、私たち畜産を学ぶ高校生が、しっかりとした考えで畜産を学び、これからの社会に活かしていくこと。

二期には瑞高祭で、豚汁や卵、焼き鳥にアイスクリームの製造や販売があります。たくさん友達を呼んで、私たちの育てた家畜の恵みを友達にも味わってもらいたいと思っています。

人工授精師を目指して

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

佐野 ゆづき

「牛は私たちに応えてくれる」これは、私の尊敬する先生が教えてくださった言葉です。この言葉を切っ掛けに私の牛に対する接し方が大きく変わりました。

私は毎日、必ず牛の様子を見に行くようにしています。それは牛舎での体験で人工授精師になる目標ができたからです。

人工授精師とは家畜人工授精師講習会を受講し修了試験に合格した者を指す国家資格です。酪農は受胎率の向上が酪農経営の利益と大きく関わりがあります。例えば今月の発情で受胎しなかった場合、次回の発情迄の約1カ月間、餌を食べ

させないといけないので、餌代が余分に掛かります。また、授精に使う凍結精液も一回当たり平均で五千円必要です。受胎しないとその回数分、費用が発生します。人工授精師の役割は家畜の受胎率を向上させ経営を安定させる責任ある仕事です。

二年生の4月に牛の管理を初めて経験しました。最初は先輩から与えられた仕事を一つ一つこなすことがやっとで、当番の日には牛の管理に参加していませんでした。また牛の管理は力仕事が多く、終わった後は辛い仕事をやりこなしたという達成感に満たされていました。牛の管理は私にとって、ただの自己満足でしかなかったのです。

そんなある日、授業で乳房炎について学びました。乳房炎とは感染により乳房内が炎症し乳質を著しく低下させる経営的に損失の大きい病気です。原因は私たちの手や器具、牛床など、至る所に付着している細菌によって起こる病気です。しっかりと衛生管理が必要となります。そのために、搾乳前に行う手洗い一つから酪農を経営するということが始まっていたのです。

乳房炎を学んでからというもの、何も知らずに「作業」として行っていた自分を恥ずかしく思いました。また同時に牛の管理に真剣に取り組もうと強く決意し、その日から私の牛への管理は一変しました。今までやってきた時間がもったいないと思えるほどです。毎朝牛の管理に行くと、牛の動きや状態の変化を感じ取れるようになってくると同時に、私の牛への対応も変化してきました。牛は私に伝えてくれたのです。牛舎には「コノミ」という脚で人を蹴り払う危険な牛がい

ます。この牛を搾乳するには、数人がかりで、いつも一苦勞です。しかし優しく声を掛けてから搾乳を始めるよう毎日毎日、繰り返し返すと、以前は暴れていたのが嘘のようにおとなしくなったのです。さらに搾乳が終わった後のことです。横から視線を感じ、ふと視線の先を見ると「終わった？」といっているかのようにコノミが私を見つめていたのです。これは決して1年前には見られなかった光景です。私は初めてコノミに認められた気がしてとても嬉しかったです。今では必ず搾乳が終わった後はコノミだけではなくどの牛にも「お疲れ様、いつもありがとうございます」と言いながら頭を撫でるようにしています。

牛舎の清掃や栄養バランスのとれた餌やりは快適な環境をつくり、牛のストレスを軽減させることができます。これは人工授精の受胎率を向上させるために必要不可欠なことです。人工授精・受胎・分娩そして搾乳。分娩してはじめて酪農経営が成り立ちます。牛舎の掃除や餌やりなどは一見密接な関わりがないように思えますが、実は全てのことに意味があり、その全てが重なり合うことで、私たちは良質な牛乳を生産できているということを体験しました。

このような経験から毎日、耳で聞き、観て、触れて、ほんの少しの違いを感じ取ることが、どれだけ重要なことであるかに気付きました。そのことが私にとって大きな自信になり学ぶ目標となりました。

これらの経験から私は人工授精師になって酪農経営に貢献したいという思いが強くなっています。受胎率の向上は発情適期の見極めや牛の状態変化に気付く能力が求められます。こ

の目標のために毎日、牛の様子を見に行くようにしています。わたしは課題研究の授業で日本獣医生命科学大学と連携しブラウンスイス種を学校の牛に受胎させることに取り組んでいます。また卒業後は大学に進学を希望し、継続的に繁殖を学びたいと考えています。私たちが日々必要としている乳製品が安定して供給されるには、人工授精師の活躍が不可欠です。私の理想とする人工授精師は種を付けることだけではなく、酪農家さんからの質問や相談にものれる、ともに一緒になって経営を改善していけると思ってもらえる信頼される人工授精師です。これからもっと様々なことを学び、経験し、将来的には日本の酪農業を支えるような人になりたいです。



高等学校の部 佳作

笑顔がくれる力

愛国高等学校 三年

石川 沙 亜 羅

私は現在家政科に通う高校三年生だ。この学科は卒業と同時に調理師免許を取得できるということで知られ実際に私もそれが目的でこの学科を選び入学した。私は幼い頃から美味しいものを食べることが大好きで折角だったら自分でも美味しいものを作るようになりたいと思ったこともある。また調理師になりたいというよりは免許を取得しておけば後の就職にも有利になるだろうと考えたためでもあった。なんにせよ最初は自分の楽しみのために選んだ道だった。

入学してからは普通教科に加えて調理の実技面だけでなく公衆や食品に対する衛生の知識や栄養学、世界の食文化についてなど多くの専門教科を学ぶことができた。特に三年生に進級してからは一、二年生の時に比べて格段に専門教科を学ぶ時間が長くなった。毎日が新しいことの発見で勉強自体は難しいながらもそれ以上に好奇心が勝っているような感じだった。そうして学んでいく中で出会ったのが集団調理という授業だった。

集団調理はこれまでの実習に比べて大きく異なる点がいくつかある。大きなところでまず一つめに班の人数。二つめ

に喫食者の数。三つめに作業時間の長さだ。通常の実習では四、五人で班を作り自分たちで作ったものは自分たちで試食。そして用意から片付けまでを含めて三時間程度で終わらせる。それに比べて集団調理では十人程で班を作り約百食もの料理を作る。当然班員だけでは食べきれないので家政科内の他クラスにも試食を頼む。喫食数が多いためその分時間もしっかり調理作業に四時間、片付けに二時間というような配分になる。効率よく動くことが要求され、より疲労も溜まり裏方に徹するその様はまさに他人のために料理を作るといった態だった。片付けや次のクラス分の用意などで自分たちの試食時間は短く、折角作った料理をゆっくりと味わうことのできないこの授業が私は少し苦手だった。さらに今年の夏休みはその授業の一環として生徒たちの高原生活に同行し高原生活中の食事の全てを担当するというある種の課題が課せられた。私の班は十四人と他の班より少し多かったが一日三食、三泊四日分の食材の検収から調理、配膳、果ては片付けまでの全てを担当するということは想像以上に過酷なことだった。朝は誰よりも早く起きて身支度を済ませて調理場へ入り、食事中も何か不具合があれば自分の食事を中断してそれに対応する。そして一回の食事が終わればすぐに次の食事の用意に取り掛かる。朝早くから夜遅くまでの調理場作業は普段の集団調理の授業と比べても段違いに疲労が溜まっていた。

そんな実習中、調理作業も終わり生徒たちと一緒に食事の席に着いた時のことだった。その時は私も班員も度重なる疲労から疲れの色を滲ませていた。そんな中会話もそこそこにただ黙々と食事をしていた私の耳にある言葉が聞こえてき

た。「おいしい」。声の方を見ると料理を口にした生徒が呟いたようだった。そして他の生徒たちも料理を食べては口々に「本当だ。おいしいね。」と言い笑顔で周りの生徒たちと話をしていた。今自分たちが食べているものと同じ料理。確かに自分でも一口食べた時に美味しいと感じて友人ともそのことを話していた。それと同じ言葉、行動。異なるのはそれを他人がしているということ。とりとめのないことだというのに何故だか私の心はじんわりと温かくなり、調理作業で溜まった疲労も少し軽くなったように感じた。自分が作った料理で他人を笑顔にすることができると、そのことがとても素敵なのと同じように思えてその時の私は大きな喜びを感じていた。それと同時に他人の笑顔を見ているとなんだか自分も嬉しくなり元気になったような気がして笑顔には何か特別な力があるのではないかと本気で考えたりもした。ふと周りの班員を見ると少し恥ずかしそうにそれでいて嬉しそうに微笑んでいてそう感じているのは私だけではないのだなと思った。他人に料理をふるまうことがこんなにも楽しいことだったなんて、その時の私は初めてそのことを知った。以前は自分の楽しみのために作っていた料理も視点を変えて誰かのために作ることで作る喜びも楽しみも倍になる。それからただ何となく調理をするのではなくその料理を食べる人の気持ちを考えて誰かのために料理を作ろうと思った。

まだまだ私が学ばなければならぬことは沢山ある。あまりの難しさに壁にあたることもあるだろう。それでも今はどうしたら相手に安全に料理をふるまうことができるのか、美味しい、楽しいと感じて食事をしてもらえるのか、というこ

とを意識して勉強している。そしてその考えは調理師という職業の本質なのではないかとようやく理解することができた。美味しい料理を作ることで同時に多くの笑顔も作れる。そしてその笑顔は本人が嬉しいのは勿論それを見た周りの人も元気になる。料理にはそんな可能性も秘められているのではないかと、私はその時強く感じた。

会計コースでできた夢

愛国高等学校 三年

成 澤 悠 衣

私は現在、商業科会計コースで簿記を専門に学んでいます。ただ単に「簿記が好き」という理由でこのコースを選んだのですが、これが私にとって大きな決断となりました。

高校に入学して初めて簿記とは何なのかを知りました。一番に覚えたことは基礎である「借方・貸方」と「簿記の五要素」。そこから発展して帳簿など様々なことを勉強していったのですが、毎回授業の前になると「今日は何をやるのだろうか」と、授業が始まると次々に入ってくる新たな知識にわくわくしていました。初めて勉強を楽しいと感じることができ、私はどんどんと簿記の面白さに引き込まれていきました。

二年生に進級する時、私は迷わず会計コースを選びました。

理由は初めにも書いたように、簿記が好きだったからです。しかし先輩から、会計コースは検定や補習などで忙しく、軽い気持ちでこのコースを選んだらあとで自分が苦勞するということ言われてしまいました。本当にこれで良いのだろうか。他のコースも考えました。しかしいくら考えても、私がやりたいと思うのはやはり簿記だけでした。

二年生になり簿記を学びたいという気持ちを抱いた二十名が新たなクラスの仲間となりました。学年が上がったということで各教科の先生が変わり、簿記も一年生の頃に教えて下さっていた先生とは別の先生に習うことになりました。その先生の授業を受けたクラスは検定の合格率が高いとの噂を聞いていたのですが、新たなクラスメイトのほとんどがその先生の大きな声を耳にしたことがあり、私たちの中では厳しいというイメージが付いていました。そのため最初の授業は皆緊張して教室内の空気がピリピリとしていたのを覚えています。その環境の中での授業は一年生の頃のような楽しさを感じることができず、授業の後には疲ればかりが残りました。

しかし私は確実に授業の内容が身につけていることを感じました。そう思ったのは、その先生が「答えはなぜそうなるのか」というところに重点を置いて教えて下さっていたからです。会計コースで目標とするのは、高校卒業までに日商簿記検定二級、全商簿記検定一級を取得することです。当然ですが級が上がるごとに内容は高度になっていき、暗記だけで合格することは難しくなります。なぜそうなるのか。どのような工程を経てその結論にたどりつくのか。そこまで理解していないと応用問題には対応できないのです。

そのことを知っている先生は私たちに深く理解することを求めました。私はとにかく「怒られないように」必死に取り組みました。するとそれがいつの間にか身についていたのです。そのことに気が付いたのは検定の勉強をしていた時のことでした。問題集がすらすらと解け、なぜこうなるのかまで考えながら進めることができ、理解が深まってきたことを実感しました。

そんなある時、友人から

「この問題はどうやって解くの？」

という質問を受けました。私は自分で理解した方法で説明してみました。しかしうまく伝えることができず、むしろ余計に混乱させることになってしまいました。検定前なのに悪いことをしてしまったと申し訳なく思うと同時にうまく教えることができなかったことに悔しさを感じ、どうしたら理解してもらえるのかいろいろと考えました。そして物を使ったり紙に書いたり教え方を工夫してもう一度説明してみました。すると友人の口から、

「あーなるほどね！」

という言葉が飛び出しました。私の説明で理解してもらえたのです。私は達成感や嬉しいという気持ちでいっぱいになりました。そしてその時「簿記の先生」という新たな夢が生まれたのです。

高校で初めて簿記と出会い、簿記を好きになり会計コースを選びましたが、将来の夢が変わるとは思っていませんでした。しかし私は教師という夢を抱く以前から憧れている先生がいました。初めはその先生の優しさや温かさを感じ、私も



そんな人になりたいと思っていました。そしていつの日からか、私が教師になったらそんな先生になりたいとも考えるようになっていたのです。今考えると、その先生に出会った時から私は教師になりたいという気持ちを抱き始めていたのかもしれません。

私は会計コースの目標である日商簿記検定二級、全商簿記検定一級を取得することができました。卒業までに取得するという目標は達成したものの、人に教える立場を目指すからには更に上の資格を取りたいと思っています。進路はもちろん四年制大学の商学部への進学を希望しています。そこで今よりも多くの知識を身につけ、より高いレベルの資格、そして商業の教員免許を取得したいと考えています。

いつか必ず夢を叶え、私が先生を尊敬するように、生徒から尊敬される先生になれるよう努力したいと思っています。

夢を叶えたら

愛国高等学校 三年

松下桃子

私は今、看護師になる為に愛国高校の衛生看護科に通っています。私にとって看護師という職業は、夢であり、憧れです。

私が看護師になりたいと思ったのは小学生の頃です。その頃は深い事は考えず、母が看護師だからというだけで決めていました。真剣に考えたのは中学三年生の進路を考える時です。母から本校の衛生看護科を薦められました。その時に看護師としての母の話を聞き実習が大変だった事や、勉強が難しかった事など昔の思い出を話してくれました。「衛生看護科に行くと看護師以外の道を目指しにくくなるからよく考えなよ。」と言ってくれました。私は頑張ろうと思い本校を受験し、合格することができました。

入学して三年。高校三年生になった私は今臨地実習を行っています。忙しく睡魔と戦いながらも充実している毎日をごすことができます。

先日、母性実習で産婦人科を見学させていただきました。産婦人科には出産を控えた妊婦さんや、出産を終えた褥婦^{ジョクフ}さんが毎日数多く訪れます。その中で助産師の職域はとても幅広く、出産の介助から母親の産後のお世話、沐浴・授乳指導、退院指導など多くの事をこなします。定期健診や個別相

談も行っています。私は看護師の資格をもつ助産師さんの助産師外来を見学しました。女性同士ということもあり、話しやすそうな和やかな雰囲気の中で出産に対する不安などの相談を行っていました。初めての出産で分からない事だらけの妊婦さんに不安を取り除くかのように一つ一つ丁寧に相談にのるその様子を見学しているうちに、私の中で「憧れ」の気持ちが出てきました。それは幼い頃に抱いた中途半端な気持ちではなく「助産師になりたい」という強い気持ちです。あとでその助産師さんに話を伺うと「産婦人科で看護師として働いているうちに、もっと色々な事をしてみたいと助産師の資格も欲しくなった。」とおっしゃっていました。今、私の夢は看護師になることです。そしてその夢が叶ったら、いずれは「助産師になりたい」と思いました。

高校三年生の夏休み、私は学校の海外研修のプログラムに参加し約三週間アメリカでホームステイを経験しました。言葉も文化も通じずやっていけるか不安でした。私のホストマザーはカンボジア人でした。日本への留学経験があり日本語も英語もカンボジア語も話せる方であり、間違った英語は正しく直し、難しい英語は日本語で話してくれました。ホームステイ開始から一週間が経った日の夜、「将来何になるの?」と聞かれました。私は看護師になる為に衛生看護科に通っている事や助産師にもなりたいたいと思っている事を話しました。するとホストマザーの妹が看護師として働いている事がわかりました。彼女はいずれ国境なき医師団の看護師として働きたいと考えているそうです。国境なき医師団の活動は紛争地や難民・国内避難民、自然災害被災地、感染症流行地、病院・

薬の無い地域などの医療・看護があります。色々調べていくうちにとても過酷で悲惨な現状、どうにもならないことが多くあるということを知りました。

なぜ国境なき医師団の看護師になりたいと思ったか尋ねてみると「自分の限界まで試してみたいから」と言っていました。その言葉を聞き「なんてストイックなのだろう」と思いました。「国境なき医師団の看護師になりたい」なんて軽い気持ちで言う事は出来ないと思います。私はただ「すごいな」という尊敬の気持ちでした。私にはまだそんな事の言える勇氣も覚悟もありません。ですが、数十年後の私に知識・技術が共に備わった時、また考えてみたいと思いました。そしてそんなカッコいいストイックな人になりたいと思いました。

海外研修の帰りの飛行機で私は座席のポケットにある物を見つけました。それはユニセフの「航空機内募金活動」の封筒でした。海外から持ち帰った外国のお金を世界の子供たちのために役立たせるといったものです。私はふと、国境なき医師団について調べてみた時のことを思い出しました。私は財布からお金を取り出し封筒に入れました。ちっぽけな金額だったかもしれませんが、その小さなお金でも国境を超え誰かのためになると思うと嬉しく感じました。

私は今回、夢のまた夢を考える事ができました。どんな夢であれ人の役にたちたいと強く思います。夢は実現させなければ意味はありません。甘い覚悟ではなく自分にストイックに夢に向かいます。その為にもしっかり勉強をしていき知識や技術を得て看護師になるという夢を必ず叶えます。

私の進路

日本工業大学駒場高等学校 一年

高橋 ななこ

私は自分のおおまかな進路を中学生の頃に決めていました。それは、「自動車整備士」になるための進路です。

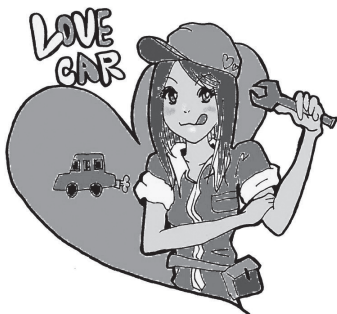
私の家は自営業で自動車整備をしています。そのため、小さい頃から「手伝い」として父に工場へ連れて行ってもらっていました。小さな私に手伝える事はとても限られていて、見学ばかりでしたが、そうして祖父や父の背中を見ている内に、いつからか自動車の整備に興味を持つようになっていました。

興味を持った「自動車整備士」に私もなろうと本格的に思ったのは、中学二年生の時でした。私には兄が二人いますが、二人とも自動車整備士という道を選びませんでした。このままでは自営業である会社が無くなってしまおうと考えた私は、将来就きたい仕事に自動車整備士を選びました。

将来就きたい仕事に自動車整備士を選んでから、私は従兄弟が通った自動車整備学校について調べたりし、具体的な進路の道筋をたてました。そして、時間のある日は工場に連れて行ってもらい、自動車の整備を少しずつ勉強し始めました。小さかった頃の見学とは違い、工具の名前を少しずつ覚えてきたので今ではちゃんとした手伝いができるようになったと

思います。また、自動車整備士になりたいという私を家族は理解し、応援してくれます。父や従兄弟は自らの進路について話してくれたり、自動車整備士の資格を得るために受けるべき講習を教えてくださいます。家が自動車整備の仕事をしているからとはいえ、自分の目指すことを応援し、支えてくれる人達が家族であるという事を、私はとても幸せに思います。そして、そんな家族の人達は私の宝物であり、誇りです。しかし、私にはとても心配で不安に思う事が二つあります。一つは「責任の重さ」です。自動車は人の命を乗せています。家族連れなど、一人ではなく複数人が乗る事も多くあります。そんな自動車を整備していて、もし整備漏れがあったら大きな事故につながります。一度に複数の命が危険にさらされます。たかが整備、されど整備なのです。前に、職業説明会で話をしてくださった自動車整備士の方も、「責任の重い仕事だ」と話していた事を強く覚えています。そんな重い責任を背負えるのか。今の私はとても不安です。

もう一つの心配な事は、「本当に自分が自動車整備士になれるか」という事です。祖父や父の仕事を見てみると、様々な部品を取り替えたり、点検しています。そして、それぞれに使う工具や部品の交換の順序、取り替えたオイルの処理などを手早く行い、お客様から自動車の不調を聞くとすぐに整備の目星をつけ、自動車を修理してしまします。整備士になって何十年の父達と自分



では全く違うと分かっている、私はそんなにたくさんの事を覚えられない」と思っていました。不調の原因を探るために必要な自動車の構造を覚えるというのも、覚えきる事ができるか不安です。「好きこそ物の上手なれ」という言葉もありますが、私は自動車が特別好きというわけでもない為、きつとおもしろいようには覚えられないと思います。「自動車の事が大好きだから、構造を全て理解して自分の好きなようにエンジンに触りたい。この車種とあの車種ではこの部分が違うため、燃費が変わってくる」というように、苦手意識がない状態であれば苦に思う事もなく、楽しく覚えられますよね。できるのであれば、私もそのように思えるようになりたいです。

このように、私には「責任の重さ」や「整備士になれるのか」といった不安があります。しかし、それらはこれからの学校生活や本格的な整備士の勉強をしていく上で、自分に「ある程度の自信を持てるようになる」ことにより、徐々に薄まるだろうと思います。そして、祖父や父のような自動車整備士になれるよう、強い気持ちを持って勉強していくでしょう。今の私は、まだその前の、不安な気持ちを取り除く段階にいるにすぎません。まだ、自動車整備士への進むべき道を歩き始めたばかりです。これからの学校生活で焦らず、少し先の自分のために生活していきたいと思っています。想像しているよりも大変で辛い道かも知れませんが、私は絶対に自動車整備士になります。

これが私の進路です。

農業！

東京都立農業高等学校 二年

伊藤 香菜海

学校の門をくぐると、我が高校を象徴する一本の大きなスギの木が立っています。それは開校当時から守られているもので、長い歴史を物語っています。

敷地内には、広い畑や果樹園、ビニールハウス、種類豊富な農具、トラクターなどがあり、普段暮らしていく中でなかなか目にしない様な光景が広がっていました。

私の通っている農業高校には、農業に関する科が三つあります。

人と緑との関係を学ぶ、緑地計画科。食品製造、食品化学、応用微生物などについて学ぶ、食品科学科。そして私が学んでいる都市園芸科では、都市における園芸の生産、流通、利用などについて勉強しています。

「農業」と一言で言っても、畑を耕して作物を育て、収穫すると言う事だけではなく、色々な方面で農業が関わっている事を知りました。

今、私が学んでいる野菜や草花の栽培では、自分たちの手で一から作業をしています。土を耕し、畑を作り、種をまいて、肥料をまいて、水をあげ、周りの雑草を抜いたり、病害虫を駆除したりと、とにかく成長して収穫できるまで

時間がかかる上、手が抜けないです。真夏の炎天下、温室での作業、真冬の雪の中でも関係なしに作業をしなければなりません。栽培する事がこんなにも大変なんだと、想像と現実のギャップに驚かされました。

そんな時でも、仲間と声を掛け合うと、自然と頑張れたりして、不思議とパワーが湧いてきます。

どの植物栽培にも共通して言える事は、一つでも作業を怠ると成長が遅くなったり、虫に食われてしまったり、病気になってしまったりしてしまいます。当然の事ですが、植物は生きています。汗を流し、時間をかけて育ててあげるのが、楽しく良いものは育ちません。本気で向き合うことが大切です。だからこそ農業は楽しいのだと思います。

育った野菜は収穫し、自宅に持ち帰る事が出来ます。学校帰りの私のかばんの中には、教科書と、ダイコン、ジャガイモ、トマト、キュウリなどがぎっしり入っています。取り立ての新鮮な野菜を持ち帰ると、母がとても喜んで夕食を作ってくれます。そして家族が「美味しい。」といって食べている姿を見た時、私は一番喜びを感じます。

二年生になると、農業の授業の選択肢が広がり、生産専攻とデザイン専攻に分かれ、各分野をより深く勉強する事が出来ます。私は将来、ブライダルフラワーデザイナーになりたいので、デザイン専攻を選択しました。デザイン専攻では、草花の栽培とアレンジメントを交互に行っています。草花の栽培は見た目の華やかさとは裏腹に力仕事で、現実はそのような甘いものではないという事を思い知らされま

した。もちろん、辛い事ばかりではありません。天気が良い日に花に水をあげている時や自分なりのアレンジメントが完成した時は本当に幸せですし、将来の夢の為に、頑張っています。

最近私は、園芸療法と言うものにも興味を持ちました。園芸療法は既に十八世紀から実施されていたそうなのですが、最近まで全く知りませんでした。土や植物に触れる事によって心が豊かになり、気持ちを穏やかにする事が出来るという事でした。また、園芸作業をする事で、手や足のリハビリにもなるそうです。私も植物と触れ合っている時は、気持ちが涼しくなりますし、農業を教えて下さっている先生方は、いつも

優しく笑顔で接してくれています。土や植物には、人を優しくしてくれる見えない力があるようです。種をまき、芽が出て、葉が付き、花が咲き、実がなる姿を見てみると、生命のすばらしさを感じさせてくれます。そんな気持ちにさせてくれる植物と関わりながら、心身に悩みや不安を抱えている方のサポートが



出来る、園芸療法についても勉強してみたいと思いました。

この夏、私は農業関係の大学や専門学校に行ってきました。ブライダルフラワー科がある専門学校オープンキャンパスでは、現在結婚式場で働いている方のお話を聞く事が出来ました。技術を磨く為に、仕事が終わってからでもフラワーアレンジメントの練習をしているそうです。一つ一つ丁寧に育てあげたきれいな花をさらにアレンジして、みんなを笑顔に出来るフラワーデザイナーになりたいと思いました。農業関係の大学では、野菜をもっと美味しく育てるにはどうしたら良いのか、また、育てた野菜の流通の仕方など新たな取り組みを研究されているそうです。農業は奥が深く、改めて農業の難しさ、大変さを感じました。

農業高校に入学して、ただ植物を栽培しているのではなく、より多くの事を学んでいます。自然と触れ合い、一粒の種を育てて収穫が出来た時、花が咲いた時の嬉しさ、そして美味しくいただけただけの喜びを感じています。また、仲間との触れ合い、声かけの大切さなど、これらは人間にとってかかせないものです。これこそが農業の醍醐味なのではないかと思いました。

馬との出会い

東京都立農芸高等学校 二年

大澤 萌

馬に「おはよう」と言って、私の一日が始まります。馬術部に入り、馬たちと出会って一年半が経ちました。毎朝、厩舎で馬たちにエサをあげ、馬房掃除をしてから教室に行きます。放課後は、馬場に馬を連れて行き、部員やコーチに馬術を教えていただき、日々練習に励んでいます。

入学当初、私よりも背の高い馬になかなか近づくことができませんでした。見ているとカワイイと思うのですが、馬の前に立つと、耳を伏せて威嚇してきたりして、少し怖かったです。馬に乗っても、なかなか言うことを聞いてくれない、めげそうになったことも何度もあります。しかし、先輩たちの姿を見ると、自分の合図で馬を動かし、様々な形の障害物も普通に飛んでいました。私も上手くなって、馬を私の思ったように動かせるようになりたいと強く思ったことを今でも覚えています。まずは馬と仲良くなり、人马一体となれるように頑張ることを目標に定め、毎日目標に向けて練習に励みました。

初めて大会に出場し、馬場の経路を回った時、障害物を飛んだ時、不安や緊張はありましたが、それ以上に、楽しいという気持ちで一杯でした。練習してきてよかった、もっ

と上手くなって高いレベルの種目に出場したいと強く思いました。馬術競技は、野球やサッカーのように団体で出場する競技ではなく、個人で馬とともに出場する競技です。しかし、出場する選手だけでは成り立たないスポーツです。部員の支えがなければ出場することはできません。また、コーチ、部員、親、先生、地域の方々の協力があり、部活が成り立っています。これからも馬術部を支えてくれる多くの方々への感謝の気持ちを忘れずに、大会に向けた練習に励んでいきます。

私は馬と出会って、今までの生活が大きく変わりました。生活のリズムも、起床時間も、毎日馬中心の生活になりました。朝昼夕と馬と一緒にいると、愛着がどんどん湧いていき、一日でも会わないだけで寂しくなります。そして、今では馬の性格や癖などが分かるようになりました。馬は環境や気候が大きく変わると体調を崩したり、練習や手入れ中、馬は人を見ており、「この人はまじめにやらないと怒られるな。」など、馬が思っていることを感じる事ができるようにになりました。馬はとても繊細で賢い動物です。なにより馬は人を笑顔にさせることができる力をもっています。私はその力に何度も救われました。辛いことがあっても、馬は幸せな気持ちにしてくれます。私にとって馬たちは、私の人生に欠かせない存在であり、家族と同じくらい大切なです。

馬術部では、地域の方々との交流も行っています。近くの小学校に馬を連れて行き、馬場馬術を見てもらったり、小学生にニンジンをおもてなししてもらったり体験などを通して、馬の

魅力を伝えていきます。他にも、練習を見に来た保育所の子供たちや近所の方々に、馬の魅力を分かってもらえるように、分かりやすく馬の説明をしたり、近くで馬を見てもらう活動をしています。十一月に行われる文化祭でも乗馬体験をやっており、最初は怖いと言っていた女の子が、馬から降りた時に馬をカワイイと言ってくれました。すごく嬉しかったです。また、厩舎の外で馬の名前を呼んでいる近所の方々や子供たちの声を聞くと、私も嬉しくなります。これからも馬好きの人がもっと増えるように頑張ります。

高校で馬術部に入り、馬の魅力に引き込まれました。二年生になった私は、馬たちと一緒に人のために役に立てることがないかと思うようになりました。ある本を読んで、私は将来やりたいことが決まりました。今はアニマルセラピーを学び、動物が人にどれだけ影響を与えることができるのか、癒やす力があるのか、自分で研究したいと考えています。そして、将来は乗馬を通して、生きる力を身に付けることができると言われているホースセラピーの仕事に就き、馬の力を最大限に利用して、多くの方々に幸せにしたいです。そのためにも今できることをきちんとやり、人の気持ちや馬の気持ちについて勉強し、将来の夢に向かって馬術部の活動を頑張っていきたいです。

私は今、馬や馬術部の仲間たちと出会えて、本当に幸せです。

命の尊さ

東京都立瑞穂農芸高等学校 四年

有村 今 日子

私は、自分の命を大切に生きていきたいと考えています。瑞穂農芸高校定時制の農業科では、毎年三年生が授業で鶏のと畜をすることになっています。三年生になった私は、適当な覚悟で「まあ、自分にもできるだろう」と軽く考えていました。当時の私には、命というものがよくわかっていなかったのです。

鶏のヒナが学校に來たことを知り、動物好きの私は、すぐに育すう舎というヒナを育てている場所へ見に行きました。孵化してから数日しか経っていないヒナは、片手で握られるほど小さく、一生懸命生きようとしていました。私は、毎日育すう舎へ通い、何枚も写真を撮って、ヒナの成長を観察することにしました。ヒナは、始めのうち高所を怖がっていましたが、徐々に私の背や頭に登るようになりました。また、声は、いつの間にか大人の鶏の鳴き方になりました。体も大きくなっていました。私は、その成長速度に驚き、喜んでいました。しかし、日が経つにつれて、体の大きさが異常であることを感じるようになりました。足の大きさに対して体が大きく太りすぎていると思ったからです。そして、自分の体重に耐えられなくなった一羽のヒナは、足

が折れ、水を飲めなくなり、ついに死んでしまったのです。その姿を見た私は、「本当に人間に食べられるためだけに生まれてきた子なんだ」と実感し、悲しくなっていました。数ヶ月経ち、ヒナから大人の鶏になった頃、担当の先生からと畜を行う日程を伝えられました。それを聞いた私は、これから罪でも犯すような気分になりました。そして、こういう覚悟で臨めばいいのかわからないままと畜実習の日になってしまいました。始めは先生に手本を見せてもらいました。首の後ろを小さい包丁で深く切り、血抜き、脱皮をしてから解体をするという流れです。動物を殺したことがなかった私は、包丁を持った瞬間、緊張で手が震えました。「一気に切らなければ

鶏が痛い思いをする」と先生に言われ、私は開き直るよう自分に言い聞かせながら、鶏の首を切りました。切っですぐに死ぬというわけではありませんでしたが、私にとっては想像よりもあっけなく、一瞬だったように感じました。切ったときのその感触は、一生忘れることはできないと思います。その後も私は、



殺すことを嫌がる人たちに代わり、同じことを何度も繰り返しました。脱皮の後の解体は、特に嫌な思いをすることもありませんでした。羽のない状態の鶏は、近所のスーパー等でよく見かける鶏肉と全く同じだったからです。数日後に私たちの鶏は、燻製になり、実習を行った生徒で食べました。「と畜され、加工したものを私はいつも食べているんだ」という実感を初めて持ちました。

今回の実習で、私はテレビや動画だけではわからない、本当の命の大切さを知りました。命を奪うのは、一瞬でした。しかし、一瞬だったからこそ、私はその命が重く、尊いものを感じられました。動物に限らず、私は毎日魚や植物からも命をもらって生きることができています。命をくれた生き物に感謝するためには、まず自分がしっかり生きていくことが大事なのです。一生懸命に生きていた鶏のヒナのように、私も自分の命を大切にして生きていきたいです。

専門教科の学習で学び得たこと

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

小林 芙 由

「トン吉、死んじゃったよ。」

更衣室で談笑している時、先生の声が入った。管理

が始まる数分前、腹を空かせた豚たちが啼きだす中、入口から7番目のストールに収容されたその豚は決して起きてはくれなかった。

私は高校で畜産を学んでいる。畜産科学科では2年生から酪農・養豚・愛玩動物の3類型に分かれ、類型の授業、管理が加わる。1年生の3学期に類型が決まり、養豚類型での日々が始まった。冬休みも明け、作業に慣れ始めたころ、担当の母豚を決める。母豚の担当者になると発情確認、種付け、受胎確認、分娩、離乳という繁殖に関わる役割を任される。生産の元手となる母豚をサポートする重要な仕事だ。

私の担当豚は「トン吉」に決まった。先代の種雄豚「ギンガ」と現在の種雄豚「ヤマト」を生んだベテラン。温厚従順で皆に愛される豚だ。2年生の4月下旬から6月にかけて豚舎は分娩ラッシュ。トン吉の種付けも意識し始めた5月末。

「トン吉も次の発情が来たら付けるよ。」

と先生に言われた。トン吉の場合、親子のためヤマトとの自然交配は出来ないので外部から買った精液で人工授精をした。陰部にカテーテルを挿入し、子宮頸管に精液を注入するのだが、奥まで挿入するのが難しく血が垂れてきた。おそらく尿道を傷つけてしまったのだ。

6月に入ってから血尿や血便が多く見られ、ある日エサを食べなくなった。膀胱炎を起こしていた。こまめに水を飲ませ、管理後はエサを練り餌状にし、口に突っ込み食べさせたが食欲は戻らなかった。抗生物質を投与したが膀胱の痛みは治まらず尿の出ない日が続いた。皆が心配して様子を見てくれたがトン吉は死んでしまった。200kg越え

の巨体を皆で豚舎入口まで運び終え、顔を覗き込む。

「目閉じていてよかったよね。苦しまずにいけたかな。」

隣にしゃがむ友人も同じことを思ったようだ。やはりトン吉は皆に想われているんだなあ。少しうれしく誇らしく思った。

次の日、トン吉は化製場へ行った。農場で死んだ豚は、食肉にはならない。化製場で丸ごと碎かれ高温処理をして飼料・肥料となるらしい。まだ子を残せたはずなのに死なせてしまった。豚舎で死んだために食肉利用もできない。死体を速やかに処理するためにお金を払って化製場に引き取ってもらう。経済動物は人間の都合に合わせて利用され尽くすのだと実感した。

夏休み中、数人の産業動物獣医師の話を聴く機会があった。動物を助けたくて獣医になったが、感染症を食い止めるために殺処分しなければならない。現場では大動物を扱える獣医師が不足している。自分が動かなければ。2010年宮崎での口蹄疫の際、現場へ出動した獣医師は言う。

疾病予防の有効な手立てとしてワクチンがある。しかし、日本では口蹄疫ワクチンを使えない。日本がワクチン非接種清浄国だからだ。日本には口蹄疫ウイルスを保有する家畜がいらないと専門機関に認定されることで畜産物の価値を高めて他の清浄国に輸出できる。ワクチンを接種した動物は抗体ができ、感染しても症状を示しにくく感染を見逃してしまう。また、抗体検査をしたとき本当の感染によりできた抗体との区別がつかない。一度ワクチンを接種すると再び清浄国と認められるには抗体を持つ家畜を一掃しなければならぬ。口蹄疫は人に感染する危険はないが経済的

理由から殺処分という強力な措置をとる。本来なら乳や肉をもっと生産できたはずなのに殺される。感染した家畜の乳や肉を食べても感染しないが他の家畜への感染を防ぐため死体は速やかに埋却処分される。資源として利用することもできない。農家も獣医師もやりきれなかっただろう。救いたいのに殺すしかない無力さ。まだ利用価値のある家畜たちを処分するという不条理。経済動物は人の都合に合わせてコントロールされ利用されてきた。だからこそめてその家畜の能力を最大限発揮できる環境をつくってやりたい。排泄物や死体も不要物にしたい。価値を持たせたい。家畜と関わっていく中でそう思うようになった。そしてそれは畜産に携わるすべての人の望みだろう。

畜産は多くの人の生活を支える産業だ。豚肉の生産一つとっても様々な人が絡んでくる。養豚農家、飼料製造・販売会社、器具器材販売会社、種畜生産・販売会社、食肉処理業者、加工・流通・販売。そして生産物に価値を払う消費者により成立している。食につながる産業は誰にとっても他人事ではない。生産者も消費者も、関連する多くの企業、団体、公的機関も誰もがその意識を持ち続け、創意工夫を重ねることにより良い畜産が育まれる。今まで培ってきた「常識」「先入観」が改善の妨げになることもあるし、知識や経験がなければ情報の取捨選択を誤り、本当に価値あるものを残してゆけない。だから生産者、消費者がそれぞれの立場からどうしたら良くなるか考え続けなければならない。自分たちの暮らしに合った畜産を構築するために。

私は実習や管理で感じ取ったこと、学び得たこと、蓄え

坂本理香

「将来の夢はケーキ屋さんになること。」幼稚園の卒園アルバムを表紙には拙い字ながらも大きく書かれていた。もともと、調理師免許を持つ祖母の影響で幼い頃から食に関わる仕事に興味があった。そこから洋菓子という一つのジャンルに興味に向いたのは五歳の誕生日に祖父母が買ってくれたデコレーションケーキがきっかけだ。ケーキに施された綺麗なデコレーションが幼い私には宝石のように見えた。薄力粉やバターなどの形や性質も違う材料が合わさることで生まれる華やかなケーキをいつか自分で作りたいと思ったのである。

のヒーローに憧れる気持ちと同じで、「パティシエ」という職業をどこか遠い存在のように感じていた。

入学してから様々な授業を通してパティシエという職業について、また働くことについてさらに深く考える機会が増えた。一見、関連のないと思っていた授業や単元でも視点を変えてみると、栄養や調理の授業内容に役立つことがあったり、新しい考え方に繋がったりと物事が相互に作用しあっていることがわかった。自分が必要だと思っていること以外にも目を向けることで、視野が広がるのだと感じた。

— 45 —

が多くあるだろう。「料理や製菓に究極はない。これらを仕事にする者は一生が勉強なのだ」と語った辻静雄先生の言葉が今の私の信念である。

十二年前に志した将来の夢は、新しいことを知るたび変化してきた。「ケーキ屋さん」から「パティシエ」へ。そして今では理想のパティシエ像を思い浮かべるまでになり、新たな夢も増えた。誕生日や結婚式といった人生の節目で、人を笑顔にできるようなやりがいのある仕事をしたい。日本とは違う環境の海外で働きたい。

違う世界にあるような遠い存在だと考えていた思いが、年を重ね、それに近づいて現実味を帯びれば帯びるほど、夢が目標になる。いつまでも思い描いているだけでは夢のままでも、その夢に近づくための行動を起こして自分の手が届きそうなところまで近づいたら、それはただ描いていた夢から達成すべき目標になるのだと思う。私が今、憧れた続けた夢を目標にするためにやらねばならないことは、新たに知ることを恐れず、知識や技術を進化させ続ける弛まぬ努力をすることである。そして一日も早く、夢から目標へと近づいていきたい。



私の将来の夢

国際理容美容専門学校 二年

早坂実莉

私の将来の夢は、美容師です。美容師になりたいという夢を持った理由は二つあります。一つめは、私の母の将来の夢が美容師で実際に叶えられず、それでも私が保育園に通い始めて髪の毛が結べるくらいに伸びはじめた頃から、私の髪の毛をかわいくヘアアレンジをしてくれました。私もともと美容師という夢を持っていたので、周りの友達からもうらやましがられるほどヘアスタイルをしてもらっていたのを今でも覚えています。

自分でも髪の毛のアレンジ出来るようになった頃ぐらいから、友達の髪の毛も最初はとても簡単な二つ結びだったり、三つ編みをしてあげられるようになっていました。その頃から、自分や友達の髪の毛をいじったりすることが好きでした。

小学校に入学すると少しオシャレをすることが好きになり、学校の友達がやっていないような髪型を毎朝母にやってもらっていました。保育園にいる時と変わらず小学校に入学してからも、周りの友達にうらやましいといつも言われていました。高学年になると毎朝母にアレンジをやってもらっていたのも自分で鏡に向かって自分でやるように

なっていました。

中学校に入り規定の制服、髪型になり、小学校のときよりもヘアアレンジをする機会が減ってしまいました。もし機会があったとしても学校の後遊びに行く時だったり、学校がない休みの日に自分や友達のをアレンジするくらいでした。中学二年生頃ぐらいになると進路を考え始める時期になっていました。周りの友達がどんどん進路が決まっていくなかで私はなかなか行きたい学校が見つからず、いました。そのまま決まらず三年生になると本格的に友達は志望校を決め、その学校に進学するため試験勉強をしている人達が沢山いました。その中で私は一人焦って高校の資料を見ていると最後のページに今通っている国際理容美容専門学校美容高等科を見つけました。その少ない資料の中に一日でも早く美容師になりたいと書いてありました。それを見た瞬間、この学校に通いたいという気持ちが一気に強くなりました。物心がついてから、花屋さん、ケーキ屋さん、パン屋さん、デザイナーとよく小さい頃に抱く夢も私もありました。母が叶えられなかった美容師という夢があったのでその時に見つけた時はとても惹かれていました。

そしてもう一つ美容師になりたいと思った理由は、私の姉に障害があるからです。障害があることで、じっとして座って待っていることが出来なかったりと慣れない環境に行くことが大変なものでなかなか美容院に行くことが出来ずにいました。姉の通っている学校に行くと姉と同じように気軽に美容院に行けない子供が沢山いました。それを小さい頃から見ていた私は、障害のある人達も親も周りの目を

気にせずに気軽に来れる美容院を作ってあげたいと強く思いました。

自分の中で夢が美容師になるということが決まり、今通っている国際理容美容専門学校を受験することが決まりました。そして今こうして美容師になるために勉強をしています。

それぞれ強い個性を持った仲間がいてみんな同じ夢を持っていて、この学校に入学出来てよかったと思います。もちろん入学したては不安だらけで三年間やっていけるかわかりませんでした。すぐに実技試験がありとても緊張していたのをついこの間あったように覚えています。一年生の中で何度も実技試験がありました。何回か不合格だったこともありましたが、その度に自分は本当に立派な美容師になれるのかと思いました。

でもくじけそうになる度に自分がどうして美容師になりたいかを見つめ直したりしています。その他にも仲の良い友達と将来どんな美容師になりたいかやどんなサロンで就職したいかを話し合ったりして、また夢を叶えるために頑張ろうと思っただけ勉強しています。

もう入学してから約二年が経ち沢山美容を学びました。学んだ中で得意なものが出てきたり苦手なものもありました。自分はカットより小さい頃から好きだったヘアアレンジが得意でした。最近は前まで母が姉の髪の毛を切っていました。最近が切ったあけられるまでになりました。

地元の友達は普通の高校生で、自分は高校生と美容学生を両立しています。その大変さにたまには普通の高校に通っ

て青春したいなと思ったりもすることがあります。周りの友達の話の話を聞くと、とても羨ましいです。

時々今頑張っていることを全て辞めたいと思ってしまう事もありますが、沢山の友達が応援してくれたり、私が美容師になれるように、この学校に通えているのも父が一生懸命働いてお金を出してくれているので絶対に母が叶えられなかった夢を叶えられるようにしようと思います。

どんな人でも、かわいく、かっこよくしてあげて、サロンを後にする人達全員が笑顔で帰れるように、また来たいと思わせるような素敵な美容師になりたいと思います。

もし諦めてしまいそうな時は、周りの励ましや支えだったり、初心に戻って気持ちを切り替えて自分の美容師となる夢がぶれないようにしようと思います。これからもしっかりと投げだしたい時があると思いますが今しか出来ないことをし、沢山勉強し経験をし学んで立派な美容師になりたいと思います。そして小さい子供や、お年寄りの方、障害のある人達を笑顔に変えて喜んでもらえるようなサロンを作りたいと思います。

専修学校の部 優秀賞

将来の夢

東京エアトラベル・ホテル専門学校 二年

保 科 希 帆

私の将来の夢は、長野の良さを長野県の駅を利用されるお客様に発信していく駅員になることです。私は18年間長野で暮らしてきて、専門学校入学を機に初めて長野を離れました。初めは東京で一人暮らしをすることに慣れて上京したので、毎日が新鮮なことばかりでした。しかし同時に、東京での時間を過ごす中で、東京にはない地元長野の魅力を改めて感じる事ができました。長野を離れたからこそ感じることできた魅力をたくさんの人に伝えていきたいと考えるようになりました。

長野県の魅力を伝える方法はたくさんありますが、その中で私は駅を通して魅力を伝えていきたいです。その理由は二つあります。

一つめは、現在在籍している観光旅行科の授業で旅行プランを作る機会があり、お客様を安全・安心に目的地まで運ぶ鉄道に興味を持つようになったことです。旅行プランを作る上で、初めはお客様に楽しんでもらうことに重点を置いて、どのような順番でこの観光地を巡ろうかなどとプランを考えていました。しかしプランを作る中でお客様に楽しんでも

らうためには、目的地まで安全に運ぶことも重要だと思うようになりました。JR運賃の計算方法や、鉄道についての知識を授業で学んだこともあり、交通機関の中でも一番身近な鉄道に興味を持つようになりました。

二つめは、現役の駅員の方の活躍を見て憧れを持ったからです。現在私は、中央線沿いの駅のホームにある「ハニーズバー」というスムージーを売るお店でアルバイトをしています。そのアルバイト中に電車の緊急停止ボタンが押されたことがありました。その時、ホームを走り回り、トラブルに対応する駅員の方々の姿を目にすることがありました。駅員の方の素早い対応ですぐに電車は運転再開をすることができました。また、ごみ出しに行くときに通路の扉を開けたままにしておいてくださったたり、すれ違う時はいつも笑顔で挨拶をしてくれたり、迅速な対応と親しみやすい存在である駅員の方に憧れを持ちました。現在スムージーを売るという形でお客様と関わっていますが、駅員になって駅を利用されるお客様と関わっていききたいです。

また、私は一人暮らしを始めて感謝の気持ちで以前よりも感じるようになりました。長野の実家で暮らしていた時は、ご飯や洗濯物、掃除など母親がやってくれるのが当たり前になっていました。ですが、一人暮らしで家事全部を自分でやらなければいけなくなってみて、改めて共働きで働きながら家事をしてくれる母親の偉大さを感じました。それから私が上京して、いつも家族や祖父、祖母に支えられていたことを実感しました。一度、祖母が育てた桃と手紙を送ってくれたことがありました。私は祖母の桃が大好きで届くのを楽しみに

にしていました。届いてみると、手紙も一緒に入っていました。祖母からの手紙は初めてで、とても嬉しかったです。どこにいても私を支えてくれている家族や祖父、祖母のためにも立派な駅員になって恩返しをしていきたいです。

自分が理想とする駅員になるために、今実践していることがあります。それは自分から笑顔で挨拶をすること、国内旅行業務取扱管理者の国家試験合格に向けて勉強をしています。挨拶は、あ：あかるく、い：いつでも、さ：さきに、つ：つづけてを心掛けています。挨拶の仕方でその人の第一印象は決まると思うので、相手に良い印象を与えることができるよう爽やかな挨拶を心掛けています。

国内旅行業務取扱

管理者の国家試験は昨年も受験しましたが、不合格となってしまうので、今年は昨年よりも勉強に力を入れて取り組んでいます。長野県の知識はもちろん、他の都道府県のこともよく知り、また旅行業についての知識を深めています。

来年からは社会人の仲間入りをします。



学生生活で学んだことや、アルバイトで感じたことを活かし、長野県の駅を利用したお客様に長野にまた来たいと思ってもらえるように長野県の魅力を伝えていける駅員になりたいです。

専修学校の部 佳作

決まっていた進路

青山製図専門学校 一年

甲斐あす香

小学生の頃、よく叔母が仕事場へ連れて行ってくれた。3人兄弟の中で唯一、私だけ。

パソコンの画面いっぱい線が描かれてあったこと、お菓子してくれる優しいお兄さんがいたことしか印象になかった。興味があつた訳でもない。しかし、何故か小学校の卒業式で「橋をつくる建築家になりたい」と言っていた。

それから成長し、進路を決めなくてはいけない節目になる度に頭を抱え、他の道に進もうかと思ったこともあったが、趣味は趣味でしかなく、自分には建築の道しかないのだと謎の使命感で今の学校に入学した。不安でいっぱいだった。何を学ぶのか全く想像出来なかった。本当にやりたいことなのか分からないままで良いのか、と入学ギリギリまで悩んで

いた。そして、仕事場に連れて行ってくれた叔母でさえ大変な仕事だから、と反対していたのだと母から聞いた。私はあやふやな気持ちのまま進路を決めてしまった自分をそのとき責めた。

入学をすると、最初の一週間ひたすら線を描くことから始まり、建築材料や製図の仕方など様々な授業を受けた。入学前の自分の心境とは明らかに変化していた。新しいことを学ぶ度に興味を抱き、疑問を持ち、ワクワクしながら授業を受ける日もあった。元々細かい作業をすることが好きだったため、もはや定規で測れない世界を描くのが楽しかった。建築に関して無知のまま入学した為、初めて知ったことや初めて経験することが多く、喜んで吸収する毎日であった。

私は最近、小さい頃のことをよく思い出すようになった。何となく見ていた叔母の仕事している姿。これは橋を作っているのだと知り、こんな線の集まりが自分の何倍もの大きさの形あるものになるのだと驚いたこともあった。チラシに入っていた住戸の間取りを長い時間、ただ見つめていたこともあった。興味が無かったと勘違いしていたが、小さい頃から建築に自ら関わることさえあり、恵まれた環境で過ごせていたことに気付いた。

建築は人間の生活に大きく関わっており、大昔から存在し、影響を与え続け、現代では無くてはならないものになっている。毎日口にする食事。食事をするための食材を買うスーパーは建物になって存在している。怪我や病気をしたときに行く病院だって建物である。私は今の進路に進み、建築に関する知識や技術を学ぶのと同時に、このような当たり前過ぎて気

づかなかった、素晴らしいことにも気づくことが出来た。私はこのように、人々の生活に大きく関わり、影響を与える分野について学べていることをとても嬉しく、そして誇りに思う。このような感動をまだ経験できていない人々や、これからの未来に影響を与えられる仕事をしたいと思っている。

今では叔母の隣でパソコンを並べ、同じソフトを開き、課題をすることもある。それがまた嬉しくて、新しいことを学ぶ機会でもある。この道へ進むきっかけを作ってくれた叔母に感謝するとともに、この進路を選び、学ぶことが出来て本当に良かったと思っている。これから楽しみながら、成長していきたい。

ボランティア活動で得たもの

東京エアトラベル・ホテル専門学校 二年

緒 方 春 佳

私は中学生と高校生の間に合計三回のボランティア活動をしました。ボランティア活動を始めたきっかけは、中学二年生の時に授業で保育園へ行き、そこでの活動が印象的だったからです。その体験後、私は市で行っているボランティア活動の団体に登録し、毎回その保育園で活動しました。

保育園では様々な事を経験しました。活動の内容は主に、

園児の保育の手伝いや昼食の配膳、教材の作成などでした。内容の一つ一つはとても簡単なことでしたが、子供と接したり、子供に何か伝えたりすることはとても難しいことでした。例えば、ボランティア活動のルールの中に、子供に対して指導をしてはいけないというものがあります。私たちは免許や資格を一切持っていないため、注意をしたり方法を教えることは可能ですが、先生方のように子供を叱ったり、教育をすることはできないのです。なので、子供と話をする前に言っても良いことなのかを考え、そして子供にも伝わる言葉遣いに直してから話すため苦労しました。

他にも、子供に何かを伝える時にはきちんとした理由を添えて話す必要がありました。例えば、単に

「走ってはいけないよ。」

と言うのではなく、

「走るとお友達にぶつかって怪我をしてしまうかも知れないから、走らないでね」

など、どうしてこうしてはいけないのか、またこうするとどうなってしまうのか、といった事を正しく伝えなければなりません。これらの事は、頭では理解が出来ていても実際に子供を前にすると、強い口調で注意をしてしまったり、とっさにだめだと理由を付けずに言ってしまったりと、上手く話しをすることが出来ませんでした。私は自分に出来ない事が多いことに悔しさを感じていました。すると保育園の先生はそんな私の気持ちに気付き声をかけてくださいました。私が上手く出来ずに悔しさを感じていると話すと、

「私たちは仕事だからこれでお給料を貰っているけれど、あ

なたはボランティアだから仕事ではないの。ではあなたにとってのお給料は何か、それは経験と感謝される事なのよ。」とおっしゃいました。私はこの言葉に深く感銘を受けました。確かにボランティア活動には報酬はありません。しかし、ボランティア活動でなければ、保育園で子供たちと触れ合う事も、保育士の仕事や働く事の大変さも知ることは出来なかったと思います。この言葉を聞いてから、私は何でも上手にするのではなく、多少の失敗があっても常に経験を大切にしようとする気持ちや、学び取ろうとする気持ちを持って行動することが出来るようになりました。

また、ボランティア活動の最中には気が付きませんでした。が、相手と会話をする時には、相手により正確に伝えるために一度考えてから話すようにしたり、相手の立場に立って物事を考えられるようになっていたりなど、ボランティア活動の経験を通じて、自分自身の成長にも気付きました。そして感謝されることで、次はもっと出来る事を増やして、また役に立ちたいという向上心も生まれ、更に自分自身を成長させることが出来ました。

私は将来接客の仕事をし、サービスを通じてお客様に満足を提供出来る人になりたいと思っていますので、ボランティア活動で学んだ事を生かし、相手の立場に立ってより喜んで頂けるサービスを行いたいのです。

また、お客様の中にはお子様連れのお客様も多いと思うので、その時には保育園で学んだ子供との接し方や言葉遣いを思い出し、様々な年代のお客様にも丁寧な接客が出来るように心がけたいと思います。

サービスというものは目には見えないので、お客様が買われたものにいかに付加価値を付けることが出来るかが大切だと思います。目に見えないものを提供することは難しいですが、保育園でのボランティア活動が私に教えてくれた、経験というお金には代えることの出来ない大切な事を意識して、何事にも挑戦したいです。また、社会人になってからも時間を作って、また新しい経験のためにボランティア活動に参加したいと思います。



平成27年度 作文コンクール 応募校一覧（応募数・入選数）

（中学校の部）

番号	区・市名	学校名	応募数	入選数
1	中央区	晴海中学校	4	1
2	文京区	音羽中学校	7	
3	墨田区	両国中学校	10	1
4	大田区	大森第一中学校	1	1
5		大森第六中学校	9	1
6	世田谷区	松沢中学校	7	
7	中野区	第七中学校	6	2
8	北区	稲付中学校	1	1
9	荒川区	第七中学校	3	
10	練馬区	開進第四中学校	1	1
11	足立区	第五中学校	1	
12		第六中学校	6	3
13	葛飾区	亀有中学校	2	
14		堀切中学校	10	1
15		一之台中学校	6	
16		葛美中学校	2	
17	調布市	第四中学校	2	
18	私立	愛国中学校	4	1
計			82	13

（高等学校・専修学校の部）

番号	学校名	応募数	入選数
1	東京都立農芸高等学校	2	2
2	東京都立農業高等学校	10	1
3	東京都立瑞穂農芸高等学校	8	4
4	東京都立農産高等学校	10	
5	東京都立大島高等学校	3	
6	東京都立田無工業高等学校	2	
7	東京都立小金井工業高等学校	2	
8	東京都立赤羽商業高等学校	10	
9	東京都立忍岡高等学校	10	1
10	東京都立晴海総合高等学校	1	
11	愛国高等学校	10	4
12	岩倉高等学校	5	
13	蒲田女子高等学校	4	
14	日本工業大学駒場高等学校	6	1
15	国際理容美容専門学校	10	1
小計		93	14
1	青山製図専門学校	9	1
2	中央工学校	2	
3	二葉栄養専門学校	1	
4	東京エアトラベル・ホテル専門学校	8	2
5	マリールイズ美容専門学校	1	
小計		21	3
計		114	17

（まとめ）

区 分	応募校数	応募人数	入選数
中 学 校	18	82	13
高 校 等	15	93	14
専修学校	5	21	3
総 計	38	196	30

平成二十七年 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

葛飾区立葛美中学校校長(中学校の部 委員長)	志村 昌孝
中央区立日本橋中学校校長	平松 功治
小平市立小平第十五小学校校長	熊井 久乃
立川市立第七中学校校長	大神田 佳明
葛飾区立一之台中学校校長	入山 賢一
足立区立江南中学校校長	宮下 みどり
中野区立第七中学校副校長	深井 明美
新宿区立新宿養護学校校長	寺島 京子
荒川区立赤土小学校副校長	出井 玲子
板橋区立上板橋第三中学校校長	坂詰 悦子
東京都立農業高等学校長(高校・専修の部 委員長)	金子 勉
東京都立八王子桑志高等学校校長	武田 尚
東京都立江東商業高等学校校長	高橋 進
東京都立鷺宮高等学校校長	石坂 敦子
東京都立王子総合高等学校校長	庄司 一也
日本工業大学駒場高等学校教諭	竹内 真
安部学院高等学校校長	安部 元彦
国際理容美容専門学校教頭	佐谷 肇
東京都教育庁指導部義務教育指導課指導主事	吉川 泰弘
東京都教育庁指導部義務教育指導課指導主事	馬場 一平
東京都教育庁指導部高等学校指導課指導主事	金澤 正美
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事	大森 晴彦

あとがき

平成27年度の作文コンクールにつきましては7月の応募作品の募集に始まり、9月の第一次選考、10月の第二次選考を経て受賞作品が決定されました。11月に選考結果の発表を行い、12月に受賞者に対して表彰式を挙行いたしました。そして最後に作文コンクール入選作品集「明日に生きる」第二十六号を発行することができました。

その間、応募してくださった多くの学校の生徒さんや先生さんの作品に対する努力はもとより、ご指導いただいた先生方、厳正な審査をしていただいた選考委員の諸先生方、さらに作文コンクールの運営等にご協力、ご尽力くださった多くの皆様方に心より感謝申し上げます。

今年度の応募作品数は中学校の部で18校82編、高等学校・専修学校の部で20校114編（高等学校15校93編、専修学校5校21編）でした。昨年度と比較して特に中学校の部で10校52編の減少になってしまいました。

この原因としては今年度、募集要項を見直して改訂したため、その処理に時間がかかり募集案内の会員校への送付が例年に比べて遅れてしまったことが考えられます。生徒指導上、各学校が夏季休業に入る前に十分に余裕をもって募集案内を会員校に送付することが必要だと感じました。来年度は日程管理を厳密に行い、学校にとって余裕のある募集案内の送付に努めます。

この作品集の編集につきましては、それぞれの作品の原

文をできる限り尊重いたしました。しかし人権に配慮し問題のある表現や、明らかな誤字や脱字につきましては直させていただきました。

応募された生徒や学生の皆様からは日々の学習活動や様々な体験活動の中から学び得たことを通して自分自身の生き方や将来の夢を展覧する作品が寄せられました。応募された生徒や学生が作文を書くことを通して、自ら学ぶ意味や将来への道筋を考える切っ掛けとなり、これからの学校生活の充実や将来への進路を考える一助となれば幸いです。

最後に、この作品集が会員校のみならず、広く教育機関等において活用されることを期待しております。

明日に生きる 第二十六号

— 作文コンクール入選作品集 —

平成二十八年三月一日 発行

発 行 東京都産業教育振興会

〒二六三八〇一 東京都新宿区西新宿二一八一一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電 話 〇三―五三二〇―六七二九
FAX 〇三―五三八八一―七七二七

印 刷 株式会社小葉印刷所